



源氏物語抄卷第十一

目錄

梅うき

春のうき



梅の枝 十八 源氏世九歳

以詞為名 梅のをもサキハラ催る樂ヲへ此詞也

西二月乃事ニなる

沙もきの事 的る形モ此モ十二歳はうの初
て悉のニ成ヒて

春之ニ今上ト也

朱雀院の皇子今年十二才今又冷泉院に二月乃例を撰
せり冷泉院に之可應和三年二月廿八日沙元服ハ

此まつる 的る形モ此モ肉ニなる

正月 節令ともして涼あつる時分なり

大戴れたてまつる 以下寒のよそきあつるへの事なり

その大款なる一似又十年に於ても唐摺を上例
年々事元秋十招の面ミツなりと唐摺の対を上と云ふ
れけい 蓋 覆 敷 設 ちんごとの物なりと云ふ
てん肉ハ必錦なり

けいとも 苗の端シマ也

こまきとも 源氏れお人なり

むあんさ 継金錦ヒキキ

金と織付オリたる錦也 金爛ラシれ丸

一税 赤セキ乃久 継衣ヒキと云

ふのたひ乃のやうと云ふ 綾羅アヤワスミ け度と云ふ今改承乃

大戴也 花沙税 人くたぬふなるを

あうとも 沉香也

うらやもとも 肉ニクとも又まじり申の物モノなり

くれとも 織回 調合テウカウ用之

らんりう うちとせと云ふ せまう也

あんとんとと云ふ みるりや

取和法門 仁明天皇年号也 漆シの法門なりと云ふ

大葉と大そりと云ふ 物モノなりと云ふ

清ツキいりめ 不男フナヒ侍 黒方と侍後と也 あらと云ふ

女メは清ツキいと何と云ふ 源氏れお人なりと云ふ

うへひんり 乃申れをれちつて 一人ヒトを雲上

放出と云ふ 花ハナ可カ法 不フ衾シ小寝ヒヤ設と云て母ハハの目

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured by a sticker.

と申分志りをして申と備て外様なる人取らひつゝ取
と云也 伊藤子と云うへへへ城の中乃やふと

八條乃式戸の 中康親王 仁徳天皇の法子系晶 河と

先と相違きり 花鳥よ委 不詮回思方ぬりし式部

方の城の所へし式部といし紫上乃又まよはしての統

と伊の源氏のとハ不男傳といりてとつひとらむむ也

のうあのもこ 母を調な東西厨子小宮八合を申し二合

ハ香壺ハ茗也 茶乃厨子れう人ふと一合ハ香壺白

久乃志ものよりと茶のうとたる壺也 並烟ハ必

あり香壺回けり入て梅花ホれ後ハ蒸烟 志母ハ壺と

中よりあると云ふ 二階乃法もハ此のさり也

兵部 兵部

前院 撰院

ちりすゑとらる 古き日記ふひこれハ位ゆりけり

人ハ蒸とこひてゆたれとゆりまるとくにまゆ一梅花

わけらふお茶のそけり枝又付てけりけり

懸務選 春にておすまにまゐる梅花とらるを切りて枝

のこける

茶のゆめと 撰へ源れ心をもめおと共戸の文意

なり

とくみまの事と ありとらるをみて月いなり

いと建くくハ 蒸と合ととやぬふととけり

らんのもこふ 況の範

かりれ修文 瑠璃の器 茶漬きなむいふりし

ひこ 西文抄 重光事涉膳具心茶花同鑑

今葉心致の松も梅も枝のやうらうらひましく離る

りのけり

あんねとれもを 思方よ縁あつたなり

松も付くろを松ハきに堪ふる木也思方もを中一か

おちよふらぬぬ白ふたとく

花の姿を身 今致院よとまきぬとらりみ枝と

早下乃心也うらん神を鳴悉乃神のたぬれ授物

まはらうけこの神ハあさかぬとる

寧相乃中お 夕言也

こうものりさぬ お梅のうら物れうらなめのを

裳うらまぬなる

うれまのうら 紅梅のうら神の薄板なり

くなくしや 曲字丸 又隈 うらうらとれあつた

にと也物乃おくれまると可む

流視乃けりてよ 源筆の次も神院へれ御也をきてま

をんせむる

む乃しに言 け煮の香ハけくこつこつなり

極分人のとらぬをうにけりしをせんすれやもい

魚腸うらうらけりし心也引言不備

とやまうらん ままをわくしつふよふりてあす
の次は前の女院へ乃言ひしつと見せたまふよやと
いふはへし別乃言を共へと云心也

海めやふき ぢやうれるり実くしくたてするま
すさくく一と撥げれと又もるふ女子れたあるれハと
るると共へし一乃 源詞也

心と見にく 姉恋と卑下なり

うとまきく ウツキニ ミハレ ミハレ 集突

うと見人の花娘恋の仰りらのに一ゆい林 モキ コレ ナリ 雲志れ勝法よとかり

好中まと好破うし一とんと思ひよと云 モキ コレ ナリ 雲志れ勝法よとかり

あつりのも花あやうりねん亦文女れをてよ中 モキ コレ ナリ 雲志れ勝法よとかり

あも相と 兵戸の詞也 林好ハ幸人なりよふりてあや

かつとものこと云心也 呼 金葉連文よ 折舟あまとり

入し物と好ゆつりれ おもくあゆらさめめと云らむ

け夕暮乃 夕暮 モキ コレ ナリ 雲志れ勝法よとかり

ふれおりのせん 若うして難ふの己せん梅の秋又と

まもみと云人そ一と 共説つまにけしと云心也

まもみと云心也

いささのころあつるあつて自

善悪種別をれ好入と云心

志道乃神のみの水 取和乃清町志を峰乃清溝川此色

地ようつまる好代相傳てそ取をたのむまとも也意相と

Shel...
...
...

とやまうらん ままをわくし流るるよりてあすこ
の波よ赤の波院へ乃言けりわをえせたまふよやと云
いるはへし別乃言を共へと云心也

海やうふき ちやうれりましくしたててするま
すさくしえ様げれと又もるふ女子れたあるれハと
るる共へちり 源詞也

ひと見にく 姉恋と卑下なり
うやま人 外人不意に應突
外人と云心也 林好を蒙るれ勝法よとがり

ふむうれしすら文 中一之乃沸るるを
阿し相と 兵戸の詞也 林好ハ幸人なるよりてあや

かつとものこ云心也 呼 金葉連文よ 折舟あまより
入し物と折舟つりれ おもくあゆるさあゆと云らむ

け夕暮乃 暮を志あつよ白ひまあれとがり
ふれふりせせん 暮りして難ふの己せん梅の赤又と

まきとくれしつりし 共説て文になしとてと云心也
りかあし流りり
いささかのとら成りあゆふて自

善悪種別をれあへとるる
志近乃神のみのな水 取和乃流町心を峰乃流溝川此色
地ようつまる後代相傳てそあをたのむまともや意相と

ふらむ源を尋ねれし梅花ハ梅れりし梅花を尋ねのそや
ふらむめこそ思ふを松れ下がるる一四季は埋日限毒

曲 河花

惟克宰相 宰おろし御すらふしあふ初てさゆその子
兵衛乃せう

ゆきふたや ひろしきむら

源も同方るるやも清流香を心に可きとけり

ふさあしせ 倭よきこと心也 批判也

さらんご 源紫花すれんれともわかるる一又花乃

香をぬり一枝と早下なまこと心なり

尚後をれとれはも ねとれきと云ひ也 源も是か

と合流くとも女院乃思ふ勝らるといもんたあよや

梅花 雲上不男傳 八條式アのお傳りくへられとも春

れれまへの心は梅花勝らると也時を思はる心丸寛お

信部の親むを丁子とてししるぬ花やのけらとるる

もやき心 くれつこも心なり

いほの風 けふ梅也

りすくしり 梅紫一様 花紫

をれ清うこ 的る上射くよよけらあし梅紫なるを

さむむらこくれこのう意交香 一名百お命と云こ

され乃をのしやくわん 取平の御門せ乃是ハや女帝

と前紫花とや一也念をのしやくわん一もあゆみ入り

Handwritten notes at the top of the page, including names like '梅花' and '源'.

茶の字入しるの

まじりの物言 西平比人芝考内縁 晴 百歩一歩
無氣百歩よ及て自名也 乙忠がうらうらし回季を皆く
合給ふゆめゆらうらうら合られしるのるひなるる
れとく此あし里 教の阿らる

花人取 務用裁人め一つりの君大家にあるる

あをれみあらし モキ 雲也

清くしやも ネト 花ハ物名第乃琴う一不取

はうろうくを弦のけ抱膠つあねとすらなり

おんざんけうり 雲音礼家とれま入まを思へ

今日ふれく程作とるす久裏ましくハ節合うり外記

しるすなり

梅の枝 緑油 梅のこにまのちきや春うけてま

まうもてはげともまうもまうのけ

まがうしうし ネト 柳巻うらま

まがうし ネト 花 助言ゆ

まがうし ネト 花 助言ゆ

まがうし ネト 花 助言ゆ

まがうし ネト 花 助言ゆ

まがうし ネト 花 助言ゆ

まがうし ネト 花 助言ゆ

まがうし ネト 花 助言ゆ

前の字入しるの

まじりの物言 水平比人芝考内録 晴 百歩一歩
真氣百歩よ及て自名也 乙忠方くつし回季を皆く
合ぬゆゆめりうく合られくめる乃むなるを
れくこれあり 殿の阿らる

花人前 揚用裁人め一つりの君大家にあるを

あをれみあらし 雲也

清くしやも 碧ハ物名乃琴く一不語

はうろうくま絃け抱膠つあなとすなり

おんごんほり 雲着礼家とれま入まを思くと

今日くなく和作とるす久裏まくハ節舎り外記

しれすなり

梅の枝 緑油 梅のこにまのちきや春うけてまれ

もうもてなけともまのちきや春うけてまれ

おんごんほり 拂巻るるま

鶯れや 鶯の音を野曲れ事心志らけるを意也祝のわぬ
あぐりこまこ つりまその野へこ心のあぐりれむ花
しらこまを母をぬむし

父をのち 源ひまの如

うらひまの音 灰中 心のや 撥遣 花れまあり

をみるらん鶯れ話くうけふまをふゆまを

ひめりてや 風をひりあらしをまはるあらしをひりあらし

くまのしるしは梅曲あつむむ一也

なまひけく まんれきのまのしるしは梅曲あつむむ一也

霞ふきき 名乃がうろあつむむを物いよひふりふりなり

月花と霞をたてとを鳥を鳴ることなりる一よこ笛

と感してきもふりこころい

海しるし まん乃きの明りこれやうふよとあつむむ

とやあまのうこに成るこも面白極也

源氏乃ためとなり

とふれぬまぬ 未だ也

花のまはきき 玉乃ぬいこあつぬ也源氏紫東城と

られと何たり人乃後り香うと妹のとらめんと也

まのしるしや 妹よとそれこころなり

海車のくるりや 車箱は半引入れた源より乃起るあつ

と也又今半を車よかろと程と仍は平

あつとや奇 けは抄文と源とをま痛む本者のいぬ

けと云後いぬ 鞍寄の軒注未買長うあつやめはら

一えと云あつ 元共戸の一枚乃あつれとも妹ハあつ

へ錦をよとぬと未買長持よねもとる人らとよわ

未買をたつ小錦をよぬたるとも害物キコウのおりひとなり

とと云むもめつと一えと云むと竹あつ二条乃れ

とと云ぬれと兼打をに裁省の花一なるてのあつ

とあつと源氏をぬけれととつと心一れし申小世之

又な紀こと 比詞を於て ちきくは教うれを
又な紀事にはおもてまんとしやおのひあひなる中
お進きとる事

うりぬれ ぬれとせられと歎嘆と信疑とひあし

た人の心むじ也

おきて申されとて 秋好申され所事

文のむしります 秋好申され事

ゆりあふ 肉肉なる人れを役をつとむるなりとある

時肉肉のいふをくきくたへし

うんと 業上も也

おりて申すまゝとて 源中へ乃南をれ時^ギに

おめあがり 中文へ蒙^モ乃事 其れとる事とうれし
と云儀る所也

まゝとて ことごとくや上りる事とたり

後のそのため 申すは^ナをたり

むせとてそのひとを 下におのひしとる事

りのなる事とも 何やもまかふにことくとも^ナ也

うゝと ぬる上

おらぬ 可^ナ書てあくと双

大のこ乃におも也 別てれと筆を不及とたり

まらも 思崩

むしりれとて方大お 陸ともなり

たのく——は 退くしなり

さやうさく ころく 何も也 ヒンキヤ 異竟かめしん 詞を

乃ひぬ 昔ぬりしききぬと源の弟老も延しと也

あたは乃三の言 梅しれを昔と云々

セ 西陸向後不言しつた也也

あの湯のこ 的る弟老

とけりさ 桐壺

文の目 ことよもなり

物の下りこ 源自方治後る皇 下秋の

やうくちん ぶぢりり

くはつ乃こ 源れ業る一のこ里ぬふ詞を

うんばのこるん ず藤 くれ昔りの今代昔成らる

いれんハ いろもふへとちりぬれと 又安寺獲命

僧の能 わりふたれうより念ひもせすまを

弘法大師浄信 系字ハ傳教 又意覚と云々

往古乃和鐘を 万葉日本記を換也

ゆたうけしを 不寛

たへり 妙よなり

とより 外なるむらうま心の奥むらうりといひ

かてを 源れなふひつひやけり

さしこふおれ事しとや たらひるまもるら

さしあしとらるる 源あうらぬららし

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured by a sticker.

源乃とて〜
つゆあはるの

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり
よのくもよのくも音曲く〜
はらふあまの作はあまのつ〜
はらふあまのつ〜
よのくもよのくも音曲く〜
よのくもよのくも音曲く〜

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり
よのくもよのくも音曲く〜
はらふあまの作はあまのつ〜
はらふあまのつ〜
よのくもよのくも音曲く〜
よのくもよのくも音曲く〜

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

つゆあはるて花はちうもふいふ必ありありあり

源乃さくく〜
の源乃さくく〜
の源乃さくく〜

ふれゆて 結好の如くもあつたよ

よりたふし しのむくもあつたよ

自まよきいせ 落葉乃花の如く

うとま 月の一輪城乃さくく〜

筆はなり

さくく〜 勝月如く 横波と 雲上と

すく〜 花を 擲し 流るるなり

まんかのま〜 すすむもあつたよ

さくく〜 心とあつたよ

さくく〜 葉まらとさくく〜

ま〜 ぬ ちうしひり〜 双紙巻物なり

香箱も双紙と云はぬなり 又巻物と双紙と

いもさく

葵戸の 香也 花束門傍 誰ともけ

ひとよりひ 一雙 葉子一帖也

ま〜 葉子とつたなり いま〜 ますなり

且れかめ 雲ハ巻つてぬ〜 とは自擲なり

海めりふ 源よりまてあつてとは神を也

うとまやう〜 ちたろり 香麗乃落葉なり

式戸のまれ共落葉 之の息よまらぬ母乃見也

あてうこ 字とてつてまどやう

事あるも

あてうこ 花あての文書ありのしるしなり
み字とてくくろなるもあてのしるしなり
中律和書のとてれまふしと云み字の押さの
しるしなり

双子の表紙なりと云ふなり

まづれ 甚谷のふるれも例と云ふ

浅みとりなる 四月天和詩

つらふそや 津前れ女房が二三人へまをりつらふおとに

けはぬへり 堪結仁と云ふなり

志ろふあふま 白糸と筆れ盤とやうふみぬ

ひらひ一投二枚也

そはみさる 正風物あふぬと云ふ

三つくりなり

双紙の詞文字まづるなり

たつくり花が二角と云ふしるしなり
つくり又さしぬの投しぬと云ふしるしなり
つくりお透るなり

筆多けと云ふしるし 花斑投筆硯款曰大
大史當立切各異域以取射炭安能久事
筆硯間平云

あふまをさるなりと云ふ詞
遠きり

今東葉と云ふしるしと云ふしるしなり

並れ詞皆の

志ろふ源乃れ作らあふ

しるしなり

しるしなり

源乃れ筆れぬと云ふしるしなり

唐のふみ 唐紙はしるしなり

しるしなり 紙のしるし

あてうと 字をまつてまゝなり

中 伴和尙サハハシ筆集ヒツシツといふ事ありとも

私 名なき又芳名取とのやうにして文字を書り

双子の表紙なりとあるとやなり

まづれ 甚谷シヤヤのふるれも例と云

儀みとりなり 四月天和後

つうふそや 伊前イゼれ女房メノボ二三人へまをりつうふたに

ははゆへん 堪結カンケツ仁ニなり

志ろとありたま 白氣と筆ヒツれ幾イカやうふみ也

ひつハ一投二枚也

そはみさる 正風マサカゼおあゝあゝ

三つとりなり

双紙の相文字アハヒまゝくめいなり

筆ヒツなげきつし

文フミ集シツふとの不及イダシなりけき

斑マシ超コト古事

今ある筆ヒツなありともいふ詞

よてんハけ物終モノハハお遠トホきり

うらな中ナカよおなナくく

並ナラ詞シ皆ナラの

中ナカハ倭ヤマト多タ々タれとも志シおて源ゲン乃ノは作シるありハ

一ヒトくくくくもはけりハくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくおと くらわれ事コトよよ

かしはら 源ゲン乃ノは筆ヒツれ紙シもとも出デるなり

唐カラのふみ 唐紙カラシハよきなり

まゝいこもふ 紙シのまゝ

紙のまゝ
唐紙ハよきなり
唐のふみ
唐紙ハよきなり
まゝいこもふ
紙のまゝ

紙のまゝ
唐紙ハよきなり
唐のふみ
唐紙ハよきなり
まゝいこもふ
紙のまゝ

みこころ なるかやうあるか

あらふくさる 草子也

女て 女の神を源乃あらはしむる也

足指の人の涙さへ

足指の人の涙さへ 花獲麟の二句これとく人又集是又相遠くこころあへ
の泪をとり足指の人の涙さへといふ人の
感よこころを泪と多くとんこの二句のこころい
よつねのうらみこころいづつ縁ゆの業迹と
えて見物に感涙とりよらまきりし物とく
麟 吾道代ニ出タルヨト也

聖人は出た數々まま不端と也定て孔子をこころ感ら
て出たゆめ也其傳の注に時麟成得るるとやて及神拭
吾道窮る日也其言乃一句と文経を果しゆ
不入るしむる事とも次はほし

あつらひる人の 糸の紙を川に也

のころももに 糸くさうり双紙出て糸くさうりなり

をふぬ ほららむらまき

つららむらまき 糸に文字と也

まがやま ことなる因神の糸成撰て也物異同一り

あるをこむ海す可也

水れつさほひ 葦子そ若乃糸もく文字はとをりかてあ

なごころも忘れあはくふありのかり いふまきりて水

れりまてすみふらとをかめしむ討なり

りやう 文字換也

以て海への人さ 若子そ海へ糸よそのとる也

みこう なるやうなる

はらふさの 草子也

女て 女の神を源乃あうけいさ也

見ゆかんの涙さへ

獲麟^{ハクリン} 一句涙と筆^{ヒト}俱^{トモ}文集^{ブツ}乞^ヒ又相遠^{トモ}くくもあへ

感涙^{カンナミ} 泣くし

獲麟^{ハクリン} 喜公狩^{キキウ}ニか得麟^{トクリン} 吾道^{ゴダウ}代^トニ出タルヨト也

晋^{シン}代^トよ出^デ仁^ニ歎^ト也^{ナリ} 吾道^{ゴダウ}と定^ニて孔子^{コウジ}とく感^{カン}

て出^デけりめ也^{ナリ} 大^{ダイ}傳^{デン}の注^{チュウ}れ^レ時^{トキ}麟^{リン}成^{セイ}得^{トク}くると^トて^テ及^キ神^{カミ}拭^{ツク}

吾^ゴ道^{ダウ}窮^{キウ}く^ク自^ジを^ヲり^ル乃^ハ一^{ヒト}句^{コト}と^ト文^{モン}経^{キョウ}を^ヲ果^{ツク}す^ルの^ノ也^{ナリ}

不入^{フコト}る^ルの^ノ也^{ナリ} 吾^ゴ道^{ダウ}も^モ次^{ツギ}に^ニ注^{チュウ}し

あつらひの 糸の紙を川^{カハ}れ也

のらももに 糸く^{イト}く^クより^{ヨリ}双^{スウ}紙^シ出^デて^テ糸^{イト}く^クする^ルなり

糸^{イト}ぬ^ヌ ほ^ホく^クし^シら^ラる^ル也

つらもくもく 糸^{イト}に^ニ文^{モン}字^ジを^ヲ也

糸^{イト}か^カも^モ 糸^{イト}なる^ル因^{イン}神^{カミ}の^ノ成^{セイ}成^{セイ}撰^{セン}て^テ也^{ナリ} 物^{モノ}異^イ同^{ドウ}一^{ヒト}

あるを^ヲと^トし^シ得^{トク}す^ル可^カ也

水^{スイ}れ^レの^ノさ^サほ^ホひ^ヒ 葦^{アシ}子^コを^ヲ乃^ハ糸^{イト}も^モ文^{モン}字^ジな^ニと^トり^リか^カて^テあ

な^ニも^モ糸^{イト}れ^レあ^アく^クお^オあ^アり^リの^ノなり^リ い^イよ^ヨも^モ一^{ヒト}句^{コト}と^ト水^{スイ}

れ^レに^ニま^マて^テす^スみ^ミく^クと^トを^ヲか^カめ^メし^シ詞^ジなり

り^リや^ヤう 文^{モン}字^ジ換^{カン}也

以^イて^テ海^{カイ}へ^ヘの^ノ糸^{イト} 芳^{ホウ}子^コを^ヲ海^{カイ}へ^ヘ糸^{イト}よ^ヨの^ノと^トなる^ル

Handwritten notes at the top of the page, including the name 'E. S. ...' and other illegible characters.

物あのみゝえしり 夫乃心

けふくき 継紙りくふりまし 日本中なり

清子れ 兵部乃清子れ乃後也

植茂乃二の清子 植茂 平城 詠也

清子乃みりり 乃言其妻乃字ありきとさうめやも
さうの清子の花万葉集一初り卷平城天皇
詔乃后撰之見古今序又万葉抄五卷一祝
紀貫之撰之祝詞卷八人抄之同卷抄不
知撰名也乃後撰清撰目錄中不見也乃ハ
あま撰定の抄とてあまのたれハ
あまえりいせ抄つらもあまのたれハ
延長の清子の花 延長の清代ハ撰せられり 和
分集るれハ則宸筆もあまのたれハ乃ら海
といわれりつらもあまのたれハ

あろりーらと定家勅を改定

延喜れみりと 延喜位より 八年して乃今撰之詔

延喜筆ありら

あれもん 雲ふとの父の唐あやなるる

おろーまむのりく 玉乃父も同表紙れ父となり

だんのうくくと 後くに組らひもる

はてれすらと 乃成冬十二振書り唐の王義之性乃抄と

町くとなり

お母とのあふら 切打書也

女子かや 秘する物ハ女く傳く物もあられり

無器用くまきいりまて男ハとなり

尚後よ 源より清子乃尚後へ也 報

物あのみゝまじり 妻乃所心

侍るくも 経張りくまらまし 日本中なり

侍子れ 兵部乃侍子れ侍也

植茂乃二の侍子 植茂 平塚 源盛也

ゆりのみのとの 古方家系乃字ありきとさうめやも

りあへとまむ物全部 田巻ゆり乃本乃たあふ

撰してあめくおなるる

平塚を奈良乃侍門とヤ 又聖成をもヤしなり

万葉八聖成乃時代より 親撰^ホ撰^ホ一々平塚大回元年撰^{世ス}之

撰考惟不便後成撰て大端はくらせゆふ奈良の侍門と

あろりーとを定家勅^{カキテ}に改定

Handwritten notes at the top of the page, partially overlapping the main text.

延喜れみりと 此即位より 八年して古今撰之法る

此宸筆^ニありける

あれもん 紫衣との名の唐あやなるる

おろきまむのりく 玉乃名も同表紙れ名となり

だんのうくくと 候くに組^ヒよりひもる

はてれすらと 初成を十二振書り唐の王義之^ヒ性^ヒを

あくとなり

お母とのあふら 切打^ヒ書也

女子力也 秘^ヒする物ハ女より侍く物もあうれりへ

無器用してまいのくまて男ハとなり

侍後よ 源より侍子乃侍後へ也報

上中下のこころも皆人へのなり

いふにこのる中一のゆためれ頼まふし

あゝ流うあは 種々^{ヌカラ}宝物の中一は別てい双子なとゆり
しうをゆふなり

あひふれ 縁合うく次廣のる乃二きけりりをせして
そ余ハ縁一たると云く

うら乃れとく 後仕 娘志をせ并

あの人 夕暮 夕乃あう一にぬまへに不成となり

一くくみ 夕の熱に中一さけ一時をゆう一とめゆれぬ

あひく我^{ゴロ}福と也

たもあれ ありぬややむみうとありあひくぬきたとあり

いんままとうきよ

れとくあや一く 源の夕暮一なる

あのとく中勢 せは祖

あやうれ事ハ せうり夕とぬ^{ナシ}

又は一くも桐壺れ昔のゆ^{ナシ}とは休なり

つれくと せか方るよとくとありぬるし出まぬと也

志^{ナシ}ひる 志りよとくは信也

りしけりしより 源のほるし 文を禁中

せよはしこめられ せよへ乃る

位れあさく 位儀^{シタ}を退自由とく趣事あり

寛平^{ナカ} 遠識^{トビ}た大ぬ 四年 元年 拾^{ナヨ}める^ビり^{ナシ} 不^{ナシ}失

ひとをまて 世の心の程と思ふやむ乃とありふり
りふありなり

つれおれをま 書れつれなき世よれさうひなるはこ

かこの思ぬい 世上乃人おむちうひくそとなり

こまはうりき 中勢の場秀への事とあも志しせす

そ又とこそぬ人 ぬふと恨なりし世なりあむ心申也

のまらとくしき 夕乃心申勢へひく心とまけ

ハ田地乃りま なることるしとくし世のやなま

夕を源氏又人よ 志しうひ心なまむとせり

夕れき世乃ほ ぬにとありて人よとくしなりとあり世の

ましとせり

あやーと 夕の心に申勢れりおのひりけねを不

書しこれとろき ぬふるま

足行るりとも 終討りり

とろよせりき 花男の逢ふのひくくまのりこと
いよ奥州のららこの実もまのつり人まいあ
ゆらね川口のせれよのこあきたとつよあど
いたちせさうつととつるこ

以討る春名 源良世九乃春より冬までのるあり
何つうまの程も 的る如志の志文へ来治事や
かれくしる 志并乃るしとありひしはあひ也

岡守此 人志進ぬまの進治乃守守をういしくしとあ
祿なくん 後仕をさしての討まや

人わろくぬ 外可治してこなきよりハヤきとや
れとの 志へ後仕乃夕の中 勢を乃事 即ちを討ひ
しなり

うじさく うちましく大くこま下は濁を習れうさ
まの討ひしあふらとま

何を治し みるより此 林一海よりさすうたうと我り
た恋とを治意しおせ

たきうぬお じこあうとる定ぬとなるるしあく治
つよありあふらとま

うのまおも 中 勢のまう夕へなりひ志治ひて後後
仕うまいあつとなり

あやまのこ 由く乃るす^玉後ハ夕此志をけつとあ
ことま

うんをつれあて 夕乃心神を足治てゆくりなく後仕
しるは治いてんまいしとなり

三月廿日 大文二月よりあつとあつとあつと

まの蘭をまゝ四月とある事誤記 咲 花

玉除服の事 亦今不入也

御弟の 花李中王 元永二年三月廿七日 皇太后 昭憲公 建立之 東海草花仕と
於御弟の 高先考 右政大臣 及先妣 皇太后 追福修法
會之 今東御弟の 昭憲公 建立之 至深車 此も代々 葬所也 之類をいへり

そはくまなくあめ川海草の山にふりまらふたてけまも

あのとこらなり

このれく成 夕心 せゆへる事

ほゆらりも 舞の肉とくらんれ 浄心なり

みと手やう 法事に事よの 布施 浄心 候とて 汲上

人 恭勤 立之

ひりー 抄し 大文れり せやとる事

あまが ぬりー 可成と 夕心 浄心 せり

ひとれめき 夕心乃 今世を 一入る 心とて ぬりー 候

かうとれり せりて なり

あうー 根をれ こと ぬりー 心乃 浄心 せりー つて ぬり

し ぬりー 大文の 世に ぬりー 別て 入る 心と ぬり

ぬりー ぬりー ぬりー 大文も 夕心 ぬり 候 仕と ためと ぬり

ぬりー と ぬり

ゆりー ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

ぬりー ぬりー ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

ぬりー ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

ぬりー ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

建仁寺をめぐりて月とありては 禪院 禪院

玉除殿テヨウデンの事 亦今不入り也

あくらくし 極樂寺 昭憲公 建立之末 深草院仕と

昭憲公よりしてあり極樂も代々イハレ葬所也 之を移さしむ

と云ふになくありぬ深草の山よりありてふたてけまも

あのとこありなり

このれとて成 夕心 せゆへる事

作はらりも 舞の肉ととらんれ 浄心なり

みと手ぬり 徳に事よめ 布施フセ浄心なり 候とて後上

人參勤立之

ひりおのし 大文れりりやとる事

あま番 ぬり可成と夕心は前中なり

ひとれのまに 夕妻乃今を一人とふむとて後上は

ありとれたりなり

あうし 恨をれとさおろきふ乃は念うつとゆり

しゆへ大文のを升るをも別て入給ひ 掃をとたり

包みしはれもむけ 大文も夕り 後仕をたのめとれた

孟一とたり

ゆりしるれ 恒世并ある事 事 丸

むあそととさ 新刻の事也

あつらふ 後仕と夕乃心うとあり

ふとととに 恒世とともる事

清みくし〜ん 何とるま次よ波仕の夕旁をヒタ
し度御かしめまなり

既いたら比 七日 来よ七日とちくれをらんぬ

ひとりれ花のり希 涼葉よそのる也

目り者乃言 志のふ流流とま田月神より也大ま乃なく

るま流しを春乃来つ〜こ也

けみい〜面白き 枝よてまれ面白と志くれを

まらつ希ぬ人保も ちとつれ花乃臨乃振作うて心と

きりれあり

中〜くお言 中〜く入り〜れ大奉〜也流申〜しお

よつて中〜く海とひたるとなるる〜あ片里乃申

あ〜あ〜もいめ〜と女ヒタ御志〜るむり

れ〜れ 臆ウカあつ〜る及中〜言と引越し〜へとなり

わ〜り〜ま こと〜く〜えは力をいめ〜とそ〜か

よま〜り〜人をもり〜り 物信

あ〜あ〜の〜 大まの御志〜る〜にま〜回むる〜者希

不〜のま〜つよめ〜るんとそ花けか〜の流氏の
志れ〜る

ち〜し〜花直衣の及友〜見う〜時二監次〜
二比花田次〜あ〜花田〜非系保〜二位三位の 若死

中お〜と〜え夕旁〜時〜掌中お非系保〜
あ〜と〜あ〜いあ〜り〜り〜〜れ〜こ
〜花田〜り〜〜との〜

こと〜の〜使けり〜を〜と〜

いのけ〜んと 夕の心

あ〜ひた〜れ 浅まのま〜りする心なり

ほろくく〜〜ん 何とあるま次よ波仕の夕姿を
一一度物かしめまなり

既いちらは 七日 来よ七日とちこれとんぬ

ひとつれ花のりち 深まよそのるや

目の者乃言 志のふれ枝とさ田月袖うりや大ま乃なく

るま流〜を春乃来つ〜こや

けふい〜面白き 枝よてなれ面白とちこれと

まらつちぬへゆも ちとつれ花乃花乃枝乃枝乃てひと

きりれあり

中〜くおさ 中〜くすり〜に大事や波申〜しお

よつて中〜く海とひたるとなるる〜あ片里乃ゆ

あ〜あ〜もいめ〜と女ヒナ研ヒナ志〜るひり

れ〜に 臆ウカあ〜るる乃中〜言と引越しゆへとなり

わほ〜り〜ま こと〜く〜まは力さいめ〜とそ〜か

よま〜り〜ふ人〜ま〜りふり 物モノ信

あ〜な〜の〜 大文のねほき〜ぬ〜にす〜回むるま者モノ信

〜の根きとがなり

新〜あ〜るま 双 夕乃ヒ巻ヒ丸

〜もゆ〜 夕乃ヒ詞

わらやつひひ〜い〜 ち〜の〜使けり〜を〜い〜

ひのけ〜と 夕のひ

あろひたまれ 浅まハまのす〜ひかり

いぬ田
#ひん
いぬ田
いぬ田
いぬ田
いぬ田

惟来儀乃花 ありてを命花のこしる也 次亦くは花田
よむるまや今宰相中におなまを二藍アヲのりく
引はくろひぬへとたり

ぐして 藝アヲ乃る也

むやまよ 殺仕れ夕書と為給町かろる

あうさく まやうらく 昔 かめしる詞也

うれを 源也

阿され 王成めまて政事かこも人不知合とたり

よの花 面白詞 由大信詞也

夏く 笑あくれ まにらう 笑ふらうとされ 花義松よのよ

かちの好ひきるうれ

かつりーまゆのり 雲と女よよすうらや

月さー 七日らるる 於来よ可也

モシヤカ カトイ
又借はも家礼 史記曰

イラヤヤ
お敬之 古徳隆子ト志也

又借はも家礼 花月名居の我いあやうこくあつ
と夕書の家礼のうらんも海しあわぬとく
とけよ初ん家礼と云い子の父とくまうす
他人られもあし准しそれとくまをとい今の
世も家礼と云うるわうまてるに一の教
と云い古来の家令と云ふよこましゆとを
つう統あましもそれいあまうちるゆんあよ
一のとくし内名居の我と稱する初なり夕
書られたり外舅られの教訓もあつたゆん
家礼の盗賜よ史記といくえうらん家令の
教まてのゆいあまうよとくまやうよえ
ゆりい

とたりり
くればやうこくまをい物をも也
いあま
いあま

いりくのひりや 夕礼詞身成まてくは仕大信う

つりよるーとあやるはへし 御らるるもま大まは

相承後乃花 ありてを前花の色しる也 次亦くは花田
よりなるや今宰相中におなまを二藍二藍の目りく
引けくろひぬへとけり

ぐて 藝ギ乃る也

むやまよ 殺仕れ夕旁を待たぬかろしる也

あうさく きやうらく 昔 かめしる詞也

うれを 源也

阿され 王女めきて政事かこも人不知合となり

よの花 面白詞 由大馬詞也

夏くは笑あくれ 夏にうら笑ふるもこれ花装束よのよ

やもぢのひまるくれ

かつりーまゆのそ 雲を女よよすうろや

月きー 七日しるるも 秋まよ可見

文モシヤク借カトイは家礼 史記曰

高祖ミヤマ孝文大公之家ニテカトイマヤク以家礼敬之 高祖隆子ト志也

大正隆又ト志也 肉大馬をわうこと根拠ふなり

花多よ奉 他人子ト准シしこれなりとす今世の中

家礼ケレと云く 官位明くくれやのしるるも物なり也

もんまやく字又志なれきとなり

るふのしるる 儒道ニユウダウの教る也

いりくのひりや 夕れ詞身成まてくと殺仕大馬り

つらなるしと心やるはへし 夢のうらもよき大正隆

Handwritten notes on a small slip of paper at the top of the page, partially overlapping the main text.

仕務政なやのりつとなり

湯可く 町直 町直可松となり

春乃く 糸 由大長詞 春日山を築れく 糸乃ちとけ
て志し 思つ 我もれまん

紫よす ありとハのちんをぬえを紫よよきくぬえのす

かへぬそのことまんとする 松より包てくを松より

咲くはえられし也 松をゆすよをてれ 肉大長詞

そくさほりり 天蓋をのてハ庭ふくくをそ 拜舞する也

きを外舅の家礼をりく けり けりや

いりるりや いぬ也 引き不及

たをゆめれや 志井もみる人くくは及のまらんと也

すんるうゆめれと

ニユキカク コトシク
巡候建寄るはつとなり

松のまこつみ 志井をよきて也

ありのえをうさふ 芦垣まのようきりきとてあつと

といふすこもれ 二股 てふいんとこれのあのもり

成松やよまうよありけりて 三股 とくはりい

家乃をとらめれやよまうよありありて 下懸くの

方の心を女成りさかして芦垣を越ていぬるみうのこ

も紙れとらめれやよまうよありと云ひ也

夕方のくこり女の事成れをにヤーさんやうう

とりなてうこりあやけうのく乃はあ也 咲

けをきう む字

との湯あがり 晝

Mののとき ぼの乃因れあしゆきや雲のあつらふ

川口のとて花弁かおのあつらふときふひ一時
夕暮れ初川口の手と庭をよこひくかた
と女よこつりけつをせうすると思つり川口のあ
らつらふのつらふりつらふ思ひつらふを
つらふりつらふと親つらふつらふつらふ
つらふりつらふと思つらふつらふつらふ
思つらふ

我孫ぬをきまれ鳥籠
園のあつら守とつらつら
ん中へ守つらつらつら
いてつらつらつらつら

あつらつらつらつら 雲井何されなとま井れれやの町つら
夕暮乃詞つらつらつらつら 以つらつらつらつら
ハ夕暮の詞お伊ひもつらつらつらつらつらつらつらつら
れおやうれつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

おもうつらつらつらつら 我孫ぬと夕暮れ言んつらつらつらつら
ゆる人もつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
とめさつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

もりにまゐる身 花き儀可用 白川くさつら 雲守
六十人つらつら守園也 奥が藤田の雲をれつらつらつら
つらつら川口のつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

晝れひもぬぬつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

年月れ けつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とものつかり 晁

川のほとり 河乃園れあつたきや笑のあつたき
や海をれともくいて我孫ぬ屋をまれば言は

河の 呂佐馬樂 河の北園のあつたきや
れ孫ぬ屋ひくに我孫ぬきをこんぬるを

まれしとを親のれともくいへ守りひりしと
つねよ親のしりまけてとつて海りしと

あつたきや 志井阿つたきとま井れやの町を
夕旁乃詞よりひもりしと

ハ夕旁の詞お伊ひもりしと事なるを園ハ月を
れおやうれしりしと事なるをよめまりの

おもひしとを我孫ぬと夕旁れ言しとあきをは

ゆる人をもりしと事なるを言 晁

とめさしと事なるを言

そりにまると事なるを言 白川くきと 笑守

六十人つと守園也 奥州藤田の笑をけつと人

寸あるは川のこみあつと也 晁説六のしり

晁れ心をぬるしと事なるを言ハ夕旁の女乃親よりひ

よりしと事なるを言ハ夕旁の女乃親よりひ
むしと事なるを言ハ夕旁の女乃親よりひ

と云

年月れ むつりく也事なるを言 晁

阿くらもあつて 不及引文 但訂りりり 玉簪あくお
もあつすねし 袖と着けもみ せ思ひうもあ
めししてていろう ぬあつせなり

申しくきふも 雲のあさきもつうく志ゆへり

申しくきふも花はるの志のいしくし作又かよひあり
しとあつち申しくきふもつうく志ゆへり
ゆきしぬそいさうをえりりしやゆへいし
あつねらふ花たつねらふ多しはよ又思ふゆへ
いんせしと

めれむとけぬなり
のむさよりる路となり
しも思ふうもつておあつ

もはく城なるりりも人をとらむむらふとせなり
ひりーの必滅 双 若夕をひりりあしすしひし肉
大のあつらなり

流るなり 流地あつらうりふくあつれを左殿王新なり

心をのそり 心道お監の月と叙勢せされとまり
けさへ又ぞと 故城又けうりり流りし源の同なり
りの言たきり 夕乃心を休休奈流ふおやまると
あそむれりりふ 肉大乃心を源氏の流へり
れおしりりす 女くしとせりり

しとおあひ 殺仕と夕秀也也
沸こともみまを ね海はれまて白夕と源との流中り也
かのづくまてハ

うとさあふとー うと花田白沸うと整乃まぬるり

源世九文
宰相のき 必又ゆのさしあは花田 夕十九歳

阿くらもあつて 不及引交 但討りりり 玉簾あくお
もあつすねし 袖と着けまみ せ思ひうもあ
的ししてころ ぬあつせなり

申しくきふき 雲のあさきつうく志ゆへり
はるせきりけつ 文れ討 ぬれむとけぬなり

又まきそぬきと 以前のむきよりる路となり
もろむおよ 悪ひー ことと 謀思うらむて 兼あつ

もはく 城りあつりき人きとらむ びぬふとけなり
ひりーの必討 双 若夕をひりあしす 紗ひし肉
大のあつりなり

はるぬり 湯地交あつりー 小くあられを 左殿王討ぬり

心をのそり 心道お盛の月と 叙勢せされとまり

けさへ文ぞと 奴胡文けつりー ぬりー 源の同ゆへり

りの方たきり 夕乃心を 休休奈治ふおやまると

肉をたつりー 肉大乃心を 源氏のぬへり

れおつりー ぬくー ことなり

ことおあひ 殺仕と夕秀也

沸ことともみま ね海らぬまて 白夕と源のぬへり

かのぐくまてハ

うとさぬおとー うと花田白沸うと 髪乃まぬまると

源世九文

宰相とのき 必又ゆのきとあれた花田 夕十九歳

ちやうしうめれありあけ香うなり

ちやうさめや あく乃あやなり

くしんちや 卯月八日

國史の如く七年四月八日^{シキマ}法律師傳灯大律師位静

安^ラお清涼殿始^テ灌佛事^{カニ} 仏を偲て水城あひせ給

するすをいつり

わくもく^フ 親王大后以下布施^セを大裏^リく^フ四^リ

す清ふ 時

あきなく 灌仏乃布施よりるを後を用^フて成^ル中^ニはより

紙おなわれらるおめけくことお母のやうに墨^{ツク}を

れまへ乃さほう 大裏乃後式^キ

わさとあ^ル孫と 夕芳に心^をうきし人なやると

ありらんやき ねとてあ^ルあ^ルこ^のこ^のこ^の成^るん

水^のうき^とち^まり^し油^を

い^まれ^は成^りの^をら^しと^周乃^契ま^くあ^ると^{なり}

女^はあ^れん^と 豊^幸と^りん^と

小^本 女^師の^母肉^大れ^小方^を乃^まり^母又^女存^存も

姑^子ひり

あせらの小^本 忠^の母

即^ちて六^条院 的^石の^娘若^未文^へ系^ゆる^り

た^いれ^う人^三あ^れよ 豊^上今^奈又^威之^を中^也

豊^上雨^の日^れ曉^にま^うて^人王^所乃^まな^玉信^希れ^別

雷神イカサをうみおひしと云ふもわきて海生とも書カサキ形をあら

らけし人必故形ニなり多々練館ニハくすすく下夜夜

ハ御ニ祖との召れきみらと云ふありと云くすすに

あさるむりるむりニ御ニ襖とも依經よ云く襖をえうさニ

形ニれ故ニ後ニのむおつひはうりニゆるる

中ニくニきニも 慧上達きくはくん坪とかりひて若

もむつるはるぬなり

流ニさニよ 慧上れはりニまきる

うれをうれと 慧上よおとるうれと志くまらる

かりひけらるるニ 慧上心持也

のぬひあちて ようぬるなれを乃ぬひせちたつ

なけきおひ あうれと作もさぬ山れ成よニおれよれ

れものをとれなけきハ

まきたつひまれ 林好中ニ文に成行ぬり

乃らぬらん 源乃るらんはまてとせ終也

うまニふ 慧上れさニより上まア乃ニくへ出は入り

近邊けう所の役き 又中

近邊つるの役ハ花野斎茶ま目茶の役近邊つる子息中ニおる代りさる車
人陪居ハ近邊つるの役官よりよとるなり 車路を車うけゆへニ衆人
役のつてより又ゆりよりよとるくの役也
あつるなり
れ被官とる

りてふありは 大教よと書禁末なうく出立の所

より源氏乃きくへ寄来ぬり

友内侍のまけ 惟芝の女々言ふとし母をよそふかしの
しつりひんがり

めもれ城のりー 夕と暮との海の中

定めらハらや夕と暮との海の中定らるとなり

何とらや夕 夕言 何とやうし暮のやう小ま成らると

也久一もあひ流るぬむしやあうき妻もたせらる

のりハあかり

ねるこー一終るぬ ぬるわうしなやはるし流るぬと也

りこーしを夕 夕種を夕言のともや文章はしこりあうしを

ひく王のきーてもあひいと云るすを思ふくむなり

も流るうしとそ種とま

柳^{ヤナギ}種^{タネ}林^{ハヤシ}下^ノ枝^エ山^{ヤマ}行^{ユク}必^{カナラシ}分^{バク}以^{ヨリ}課^{カク}賦^ヒ及^{ツキ}水^{ミヅ}之^ノ事^{コト}傳^{ツク}其^ノ及^{ツキ}事^{コト}

とつひにうしーたる 暮原大長冠ーゆげの娘母の

うしゆりきる 久美のぬの種もねるはうし家乃風を

もゆりせてーくれ

葉^ハ風^{カゼ} いろ優りうしをてなり

博士^{ハカセ} 葉^ハ風^{カゼ}のあらんとあぢらけるを

ゆふ葉^ハま 双^{フタ}比^ヒ

小方^{コウ}ろひ 葉^ハ上^ノ 娘^{ムスメ}老^ノゆ^ハ入^ル肉^{ニク}うしなり

うれみうしー流るもや ぬる上

あの内^{ウチ}むしや 娘^{ムスメ}老^ノゆ^ハ心^{ココロ}

うこくむしや 葉^ハ上^ノの心^{ココロ}や娘^{ムスメ}老^ノゆ^ハ的^{テキ}上^ノなりとて

あゝあゝや

足とくも ぬりやねとも足及もーとくやばり

阿なこも 明るよ

さ同車める上うらまゝくさりの
車よのうてまうけつたる尾末のちうくさう
わゆこちとてえいふえまうせとく思はれ
と此柳御徳丸
とみらるーりつとさうし

人ーゆけり 雲つり浄子のうとかなり

あの事ーは山 雲れは版に浄子のるま成也

三日まーと 明るよ系結るー雲ぬれくさうれ次不所

對面あり

浄まーう ひらきれた討

物種おーとね 雲を瞬るん ぬるを母乃とくまうり

て雲城雲のくむと私とくめの上と双比よまうとく

むへさうま 源乃明る上にけむ深をむとさる

又いともさう ぬる上ひらきれたとさる心中也

あてくるぬ 雲上 ぬれま大めさるすとまぬ一人

ゆり物とま うれさとまもむさひらくしてさるのまぬ

物を渡さるたり 引きたむと引のるさる

まも 赤んぼ

まよまなり ぬる上の版りらまうり

うへまはれへさ 雲上

あなほらうーのさへさ 明る上の心可癒とさなり也

あふろふや

見とふふゆわねとも見及ゆふふやせむ

阿なふゆも 明る上

その敷う人うむて 業上を回車めの上うらむくさりの

つとるを 花多ふ尼ふと此柳津五五流

日りのゆく 是も明る上

人ふゆゆる 業上の浄子さうとかなり

あの事ゆふふ 業上は版に浄子のるまは成也

三日さくく 明る上系流る 業上は人こうれ次五五不流

符三 對面あり

浄まうう びくまに討

物種ふくく 是を瞬る 娘を母乃見くまうり

て業成さのくむく私くめの上を双比よまうくは

むへさうを 源乃明る上に此心深をむとる也

又つとるさう 的の上びくまにさうの中也

あてくる海 業上 女はさ大のころるよまく娘一人

ゆわゆまき うらふとさまもむさひふくしてはのまわ

物を渡さうたり 引きたむと引のるさう

文も 業上

むすよまな 的の上の酸りうまうり

うへとあれへさ 業上

あなほくうのゆへさ 明る上の心可流とさなり也

乃又とみんとと

二葉より身 後撰友原雅正 家もふを名く心者の聲

二葉より分 花仔標七有京雅正 家もあもふ 一ひららん
こころをれ着るれんものありや 貴代うらん
今葉名くはひららん之師さあひあふこ と稱してめれと乃よれ里
とりのらん

二葉の外より大文れ清なり
きつむらるる

ちいあさまとも 白氏又葉 鬢縁千万白 池者八九緑

童稚畫函人 園林津高本

一ひらとくまも 悉のくし一 村湾中一れ言乃そけ
こけんやも成うけりらんれ

多よるりも 二葉也 世并乃心してとあるる

はうしとて 曹子くなり

なれんきも身 夕よ清水おまはあさうてや

なれんれ身 つれなてを親のみしぬとりゆらとせ

あつをぬくまひら心れあを何故きつるのあひるる

いしつぬもあさくはらけく水とふれ

たもさひ ねるますなり

あつもあ 二葉まますを死ねん

かハ又ひら 女もあるる ときを慶てひり

あの水乃心 るれうらな言と又てさひいとの

霜さこし 二葉共若れと云詞也 二葉乃中してや

あま翁を用捨ちたりとよや

乃多とみんとそ

二葉より身 後撰友原推西 ありふを名くは首の巻
たきこむ乃あるし 如葉代ならん

二葉より身 ありさるしと稱してめれと乃よれり

二條改よ 大まれの家へ也 二条の外よ大まれの清なり

きんむらるる

ちいあさまとも 白氏又葉 鬢深ヒシ千方白 池草チ八九緑キ

童稚チ盡ツ成人 園林イ草カ高木

一ひしとくまも 悉りくし 一村清也 け言乃そけ
さ那んやも成りけりうれ

多よるしも 二所也 玄井乃心よてもあるる

あししとくまも 曹子くになり

ひれんきもき 夕ユフ清水シヨウスイふまはあさうて也

たれ人れき つれなきてを親のみしぬとらり くらと也

あつちぬくまひし心れあを何故きんりのあつちぬ

いあつちぬあさくならん けい水とむれ

たもさし ねるしきすなり

あつちぬあし 二所ましますと恥ハれん

かハ又あつち 女もあつちるるしとくまを慶ウレてり入り

あの水乃心 るれうらうらあつちと又てさしひともの

霜フキさししとくま前マあき若れと云詞也 二所乃中しよて也

あ実翁を用捨ちれんしとくま

うれくこの言 前詞小箱ハしひかてとあり陸而大
まれるるし書并乃れとけしき入る成終る心下る
多想よ也 殺仕事 人の業 りあし愈乃亦翁乃りし
む所さく人し小松を若打ひりたり河
りれささめ乃や也 うらもるそ陸といたのむ成
乃松まもる林れ風ももつあ

神皇月 康保二年十月廿三日村上天皇朱在院に御幸

まし例とらうして書り

たむ ヒタリニキ 馬 六条院御用之り

せしやう 如幕

三十一 御厨子 主上の御膳をけりしとれ所

西掖門入御厨殿乃右臣作令捕池魚右末門後日
法鏡相臣持取捕得魚奉進見則御前料理供
膳餘給侍臣 右末門後日
此時綺射ハ三度ハ

入裏もあつ所乃と今日よとら

同十八年二月廿日入神泉苑東門主馬坊下輿
此間右末門細捕池魚付御厨子不調供又南
屏傍下調給侍臣不及厨一割競馬

奴のくろくこ也

同年十月八日幸朱在院為院造作及御馬也
左末門皆右末門持捕魚依法在馬坊官人
牽門郊令牽細系入施細池得鯉鮒十餘尾
御前調供又北東御下調給侍臣

湖觀乃り幸も高給侍

助満仲左近府に多乙さ心道番長幡原河亦並る御幸詞
ト云々 意御死人不れ被友也

一日死人歌延定物長以たる

たむの 持のひ意御死別もは似る但速にふかへ

おとの小 御膳より海いり也 御

みこさう上さ戸 玉のえ献物より成り人れまわ

わづら 修治なるる

大吟く ねんぢく 二ぢく 三ぢく 四ぢく

あつれん 賀玉忍

おとされとく 後仕

うりれみのせ 南心

お母さたとく 子息執務之町又孫踏定條也

又海されち 朱雀院乃座代にまゝく 一りり成て

らーとるる 源

れとくそのねとハ 後仕

れあのみきとく 源ハ号号小あつめりねと也

雲のせち 後仕 雲を去早の心丸竟と上町雲を去る

徳母共云く 雲代 初端也 又雲と禁中乃る ともりん

雲のせち 後仕 雲を去る 久くこ乃雲の上とをみる

雲とを漢とそあやまこまける

町とく 古今 秋をくまて町とまける 乃花うら

ろふくくは文乃まきこねる

浦とくくはなしなり

白橋トシクリ

花巻よ委

ことばーといひー町とわさ

くわあまきこの額とみり

まらふ赤らちろくもこ花白椽ニ二及あり
めゆらういまたあつらふ赤及こもよほつらこ
いつこつらよけ名とえつらいとんえぬゆらう
こつら赤童の衣装とつらたのあつらよ
わりの下つらこ右いまたえいそのめの下さ
秘く秘初赤らもたの赤る伺いあつらよ
又とつら赤童のまよまゆをつらぬ海
よつらもこの山服のゆり高あまの例との
せれつらつらわかけちろぬゆこいんち水
赤初赤の統い若あまら

わづら 修ゆなる

大吟く ねんぢく 二ぢく 三ぢく 四ぢく

あつれん 夜王恩

あふされく 夜仕

うりけみのを 南心

お母されく 子息執務之時又修定家也

久保され身 朱雀院乃所代にまゝく 一する成く

らーとるる 源

れくそのねんハ 夜仕

れあのみきく 源ハ号号子あつれぬと也

雲のちり 夜仕 夢を夢の心丸光と生可雲をいふ

徳母共云く 聖代初瑞也又雲と禁中乃る

王雲のちり 雲ふくをあつり 久くこ乃雲の上とみる

雲と云漢とそあやましくまひる

あつり 夜今 秋をくまてあつりまきく乃花う

ろふくくは久乃まきける

けくを志く 夜夜補く人なむしなり

何とまあゆまてけくをこ 白橋トシクリ 馬番白

差別不龍く 雲束と可心 花多よ委

けくをそのまねきく人きくとけくといひけくわさ

海りくおもす也

まのれみけくおひくをり 一くあまきくの額とあり

Handwritten notes on a slip of paper at the top of the page.

町く不 樂不及用意大鼓大鼓なりし 礼葬なりとあるを
ことくし記となり

ゆんれけりさ 女司 琴やわりのゆりやあるを

清記延喜八年節令雅樂寮立樂の後和琴 了多

法師也日 唱言か中座奏之

うぶ乃法師 寛平一法皇御崇まれ繪とまひ名 和琴

杖をるて言 朱雀院

うめあめそ 朱雀院左位よりぬけりるるる

下を御速懐也

よの清乃乃 天子朱雀院御代のお累乃女にためし

ひくとなり

源と所門との法形也

中納言ことく けりやうなるきいりしむなり

夕之同様なるをかめしむん

笛 夕

中一 并おのお可法とある

清けらひ形めり ひのの執世と後乃御指所みした

笛となり



源氏物語抄卷第十二

目錄

わが家上



百歩の方をいひえて花け後の約束の心も
以備し思えて今の蓬衣考百歩考といふよ
うに思ふとふらとつらとつらといふ名の合せゆる
蓬衣百歩の二とれ合ておくら見忘るる心
やそれいふと是れゆる一は朱萑院の承平の
御門のゆる公思知長もせははて合考よ
よ一は人々朱萑院の蓬衣考といひ別
公思知下の考きつ方とかちゆる百歩の方と
云い香氣のきくふゆりとりて百歩考とい
ひつる一方よふ心(う)さり心二は朱萑院の
蓬衣考と公思の百歩考と二粒とめ名の上合
けりとも云一は百歩考の四条大畑之の考より
かよりゆるとこれと承和百歩考と名付
し昔よりあつた方とれ公思の考よりゆも
く(う)さり心とあつたと思えてと云詞は柳花荷
葉考といれもあつたゆり(う)さり心と名
け二の方をいひてあつた考つると思えてとい
ひつる

お茶ちりりる

り山なりみて 新園史云仁和四年八月十七日

新造西山内乳寺の帝周忌御祭 天子の御祭

おくとも如比ふ立勅使必准御祭令 大曆六年夏孝文

皇仁和志終り終り事に相叶丸 花よ素

承平承平門ハ乙曆六年三月の出家して四月小仁和

寺に遷居あるは物終れ朱雀院を承平承平門に准して

中ノ御也又うれきと念合あり

承平承平門 遷居 宇多承平門を出家後朱雀院と中

約り承平四年に朱雀院の処方乃りる季ア玉記

みえらる

もく女由 取香波 舞臺乃妹

けり破に女由成る久く来へ二對面一なり

けり一話と 女由終り也

あのせり 院乃御討 東文へ作りこまぬる事

女由中もむうくさ しく終りひ合て清さあま事也

されともく女由乃 女三乃母女由也

うー乃みんとまてさ 女三とま文の母女由れこのう

まろみんとまてさと 双地

海つらつわう 女由交交なやま

右院のうへ 朱雀院れ御討桐壺乃清造云御祭をよる

大座けと 巻巻びきのは度もあれし也

Handwritten notes at the top of the right page, partially obscured by a sticker.

そのかたしとれ 源月夜 源氏の事となり

春をたこめり 源舞ををぬふる也

その道乃やとに 人の親乃むハやみよあし林との子と
とふるよ海ふひゆるれ

くくはし心 治子れためむくなくれよ人の思ふ
事しをあらうんとなり

ゆく末乃世 冷泉院を天曆の門ふたすへなれなり

あの秋れ乃幸 十月を林とりん政を親を養するゆへ
と也志秋と云よ春よ夏を扇をり 拾遺記の雜の云

に交属を乃幸哉十月とらけむむる也

年乃つとつと 年よれむ

今も又うくちりつと中とらり花 源へ大やけおつりふまら

明るの娘をの東文の女中よりけり

一男のうへハきの 齡壽殿ともわりのとと源の力よとれ

かきくあくる也

ハタチ 女ももわけう 夕暮 中納言女に前年十二月也

年治むねぬ 夕と云いの中納言くみまし後なり

ゆとりお孫多く 女三きくおるゆへなり

ののりん乃 六条院

そのりめして 朱雀寺より地へくる也

そのりく一也 禁中へくるりやれ事なり

またの世 前世乃のいさやうとなり

そのかたしとれ 勝月^{ツキ}の 源氏の事となり

春之かこめも 源舞よをぬふる也

その道乃やとに 人の親乃心ハやみよあしおとの子と
とふるよ海ふひゆるれ

くくはし心 け子れたあむくなくれよの思ふと
事しをあらうんとなり

かく末乃世 冷泉院を天曆の門ふぬすへなれなり

あのかれ乃幸 十月を林とりんぬを家を煮するゆへ
と也志秋と云よ春よ夏を属をり 拾遺記の雜の云

に交属を乃幸哉十月とくけむる也

年乃つとつと 年よれ心也

か院乃しゆいあしれとも 源へ大やけおつの子なり

・れつと事^{ナリ}清造^{ナリ}云なり

一乃のうへハその 齡^{イキダ}爵^{キョウ}殿ともわの事と源の力よとれ

かきくあくる也

^{ハタチ}坊ももわけう 夕暮 中納言女に前年十二月也

年法むねぬ 夕と云との中ゆへくみまし後なり

けとりの孫多く 女三きととるゆへなり

ののりん乃 六条院

こころめして 朱雀寺あり地してる也

ものくく一也 禁中一なるりやれ事なり

きたの世 前世乃のいさやうとなり

これの事なり

ニシテ 女 ちんちんともうもれ中あり

ゆくのあはれもや 女一より源大おろし成ゆへ

それよこれのいとこよりくた夕暮の十九年とこころ
中納言よ任せりゆとつら

よやまらてもなるよし 源氏ふまらぬるハハくくあ

らんよや第一寸さぬ事もやあらんこ

肉のハ中一文 林好

あやうづく 不めくう討也

中納言 女房の討

清祿りひふかく 雲とて中意もを今よめあれぬを十分

たつととてや也

前母院 懐の秋迄

あつげろうを 院乃は討おぬし 欠す人し 双

ゆきむくせ 觸

ゆきむくせ 兄弟敵ともひのむの想よとなり

あさひのまん 欺詐 たらうのさげくひぬ

お母しおらなる 双

た中一舟 六条院のつひらをえし 芝草圖人なり

ふひ ふひ

むのむろとつあしも 何たる不意お事てをといへる

あつあつすら 天子のゆきお事やもとなり

ちりえ 雲をふすしとそ思候しより妹とむのぬ

取床後乃花 討けりちりえをえしとあつと也

歴んしとなく 誓よ

いみじき人と 誓よ乃じよしちや世ひ終るの女らよ

よみ人れやうも人しめさけりとなり

さうりし終く 弁討さ海くつひて又教とと事

より面白種也

所れハあの世乃 源北は心中 弁経^{カケル}の家来戸てあ

ひとを扱ふさめと也 ^{ホシタキ}弁討むもある也

けみされまじり たち弁みれあもとも

院乃内あまき海 源のるし誓よ 明るよ 花あきか

も源入りまおあとも也

ちのくくるん めれと来へや上なり

いりなる誓よし 来れはむい切くとま

ありしき 源乃海むといり

さ人よふ 平人り人女ああ中へ後うじのあ

ねくともあ

めき海しき 誓入りまをさそはとたり

いられ存のやうとそき 尚世を得^ヒよけ事とがとす

みちわくくよ花わくくうい万もよ内達きり心
未の世といふる上篇なりよもよりいよ
いしあそい人よあさむるのあき
とり

はむとまきく 我むとらひつむりきあくとけり

まきく海人 呉たもやいほとまとも

あつし下人 ちけつハあきあもく ちあつしあふ

源人しとなく 豊上

いみじき人と 豊上乃むよらむや世ひ終るの女らふい

よの人れやうらふ人しめさけりとなり

いづつと終く 并討さ海くつひて又教とと事

とり面白種也

所れハあの世乃 源北はひ中を并経は家来戸てあ

ひととあふさめと也を^{ホシタ}討むもある也

けみされまのり た中へみれふもとま

院乃所あるさ海 源のるし豊上 明る上 花おきか

も源入しをとおすと也

ちのくくるん めれと来へや上なり

いづつなる豊上よし 来れはむい切くとま

ありしとき 源乃清むとつり

と人ふ 平人何人か多あつ中へ後しむのさ

おききとる也

めきあしと 豊上しをくさそはとなり

のたれをのやうとそを 尚世を^ヒ得よ付事とがとす

かうつふを ^{ヨロツ}美し討^{タツ}ししむのちうむ得

豊上となり

はむとまきく 我むとらひつむらもあくとなり

きかうゆ人 是かよやへはむとまき

あつし下人 なるけりハあし事とらうらむとあ

Handwritten notes at the top of the page, including the name '源氏物語'.

志こころふをたよりあつとるる也

汝子にりれ 皇女がとのわさく〜れ男をつさあ〜く

〜とたり

若き人の 不及申しおやハ御いもうあ〜り〜世のさ〜

ひとる也

つげ成もつり〜じり フニニキ 風奥寝之氣示所止

つひもてゆきき 天子乃は女ハメがこれ故コトは持モツをわ〜り〜

何れ人乃娘ムスメれ那と〜く〜

亦同ナニはり〜とよや

の定サダメ〜縁縁を喜喜意意を望望乃あ

やまら〜りあ〜す〜たり

いひてゆけし花み〜ちのさ〜り〜り〜
おぼろ〜と又名の節〜あ〜ら〜れ〜人の娘の
あ〜く〜ち〜す〜ゆ〜よ〜め〜と〜ら〜る〜此〜親の西
う〜せ〜ま〜る〜と〜い〜ひ〜と〜て〜ゆ〜き〜い〜あ〜り〜わ〜ら〜ん〜
り〜ら〜ん〜

ハ幸サイハシもりれあ〜ひなれと手

〜て人のあ〜い〜い〜て〜花よあ〜ひれ人の
〜と〜い〜た〜あ〜ら〜も〜く〜お〜わ〜ゆ〜り〜ま〜ち〜て〜上〜落
る〜よ〜の〜ゆ〜い〜り〜ま〜を〜よ〜と〜ぬ〜ゆ〜

むつ〜り〜れ志のひわさ 孟子曰孟子女子女子は而而恥チるル之之多多家家又

母之母ひ人人皆皆在在之之不不納納又母之母令令媒媒妁妁之之云云鑽鑽沚沚相相窺窺踰踰

牆相ガキヲ窺シ又母カキヲ國人カキヲ賤シ之シ

のあ孫のおの方の方して花花二系二系志志政政志志長長の四四れ志志
か〜つ〜本〜れ〜あ〜つ〜皆〜ち〜と〜の〜母〜の〜彫彫月月花花の〜あ〜い
〜の〜の〜の〜の〜あ〜孫のき〜こ〜ん〜
か〜い〜や〜ん〜と〜い〜と〜花花か〜い〜や〜ん〜と〜い〜と〜わ〜ら〜ん〜と〜い〜と〜
ち〜り〜人のの〜あ〜い〜と〜い〜と〜ち〜り〜と〜い〜と〜ち〜り〜と〜い〜と〜
と〜思思ひ〜た〜

とねほち〜り〜く〜なり

ま〜い〜ゆ〜ら〜ゆ〜あ〜て〜さ〜な〜う〜な〜る〜人人き〜く〜大大る〜と〜也

いよ〜く 朱朱の涉涉討討るる也也は〜と〜な〜と〜乃乃あ〜ら〜なり

ふのたふい 今之静にたふしませやも於山林へとむら

る也とけきと煩故山林のほむ新漢とよや

もよがされてるん 句 ことなうらるんを句

うこくおあまた 紫上花お甲 明る上 ぬとのあふ

とてあうらうしむくもなうとるうと

人乃ひうや 女之文ひうとたり

乃をりお 源のむと終終也

おりすう 源とほ速枝なり

又大納之 赤雀院乃別當さ茶晶

おる井の沙門のうのそむくをり人己親王家ふあり

女之文のぬ家目をれうむなり

若きおやうに 心三位源物長樂姫若漢法天皇二女なるこ

天皇選聲未得言人太政大臣心一位教東朝長良初来

之町を皇悦を同標並編御勅嫁之

又なくりらぬん 二心なくれもそんまそいぬと也

おぬ門橋 拍彫月敷て終終也

のきりうあうや 清春かうし不計とたり

阿孫文さう せ霧ををて人もやあれぬとたり

のれお方して 回忌彫月敷乃婦也

た大將 ぶうらうるを

お大納と ますのうし法と聖 大納之也

あそりお うめてらうらうと人乃かうとそい像

物と思ハすらんれ

かのめなすもき 女三を心を世并とるる也

治定^{チヤウテイ}とて也

ひま乃由と 源まへくより及まらんと死律也

ひくろしき 源元并への討

あく亦又源 かくとく三乃神れとうとたり

けし源弟と 老女不定なりとるる也

とりりれて 女三之

不定とつひて 定るる面白^キ討^キ也

あつれ人 乃へよまらるる人に候^{イハシ}なりとたり

いさひひ也

あのみこれゆけり 女三の母と傳^{ワタ}むとて姉妹也

いふなり 義人^{トシ}のくあしめむむむ

年も善ぬ 今き来り一年のむりぬとあり

湯きまのしと 孝^{コウ}王^{オウ}記^キ天曆六年十一月廿八日昌子自

親王初服^{チンオウハツボク}禮^{レイ}主^{シュ}上^{ジョウ}親^{チン}法^{ホウ}贈^{ゾウ}物^{モノ}は^ハ膳^{テン}厨^{チュ}子^シ而^ニ并^ヘ倫^{リン}之^シ

以下略

いふなり 疝字

いふなり 栢^{カク}汝^ニ 朱^{シュ}雀^{ソク}院^{イン}よりあり教也

栢^{カク}梁^{リヤウ}殿^{テン} 皇^{クワン}后^{コウ}乃^ノ在^ニ前^{マヘ} 西^{サイ}北^{ペク}對^{タイ}面^{メン}治^チ理^リ治^チり

と治^チり^リれ^レ后^{コウ} 長^{チヤウ}信^{シン}親^{チン}傳^{テン}云^ク 又^{マタ}命^{メイ}戴^{タイ}赤^{セキ}璫^{トウ}金^{キン}璫^{トウ}

明年^{メイネン}冊^ニ 為^ニ美^{メイ}妃^ヒ也^ト 后^{コウ}册^ニ册^ニ用^{ヨウ}云^ク 命^{メイ}してをよりの

物よそ也かよう せんごの ぶしたう くのりの

ゆりゆひま 藤子内親王のゆきまの騰ゆむし一糸

た大馬乃例 今ハ後仕

あこところ ちち大臣

発人取 発人あましく今の世中も調を調かこころふり

てあり

そんじや 昔志 大變れ時考若と云るりあり

く別てと心持て可然 唐の徳壽齒の三乃肉一あり

とてしきさつとつり

も者れち臣 花見ハ大饗宴の例とりていもえの 又上れ家式もな揃乃物れきや

爵齒の三れ中一もあれいそ志とつり 今佳きや

昔の表とさうわさて 花弁文のいさりの時朱 産院のゆりまきとわたりめりゆとあり

唯今ハ例とつり 唯今ハ例とつり

乃御は恩

うありか花さうありの五又字二のちあり くによをてよとゆん

櫛といひいよさも物あれいさうありとよこ たるまへ目のきりぬり

ゆつり櫛拾遺をさるれ 玉のをさうとさう あり又う衣しきい いもさうあり

せいさすと云ふに拾遺集 ちやよむきりり あり人の心とみまけ申のまゆめい

物おもひがなのひりとましてまんでらてむさうれや 一はまのまにんたにたり

本交の次ふあやうとんれとさうや

ひり乃表とさうとまきとまか表文のき表のさうと

佐よそ也かよふ うれしきもの ことたり うれしきもの

ゆきゆひより 藤子内親王のゆきよの藤ゆきよ一糸

たては乃例 今ハ後仕

あつことより 左心大臣

幾人取 幾人取まゝ今の中も 洞を洞かこゝふより

てあり

そんどもや 昔志 大變れ時昔志と云ふあり

く別てと心持て可松 唐の徳壽のさ乃内一あり

さる昔志とつり

申えよと けもまゝにき老髪上れ 家式より櫛乃髪を也

のるれ 秋好入内乃町米雀より 秋好より今此き也

まれ播のまけ 申えれまけ

娘之乃内こに 娘之の内こへ ぬり院れは即こる

乃御湯息

さうはうのち ぬれりやくにふをてまゝぬり

孫さひの久こに心花又果下るる 八日のさうぬり

心別なり

けし物 秋好葉より 申え乃さうはうのさう

ゆきゆきより 申え乃さうはうのさう

ゆきもゆきよのひりよまゝてあてらしてひさうれ也

申えの次ふあやうらむれさう

ひり乃表さうさうさうさうのさう

まて祝云とありしとさけいひなるる

あらしう子 院之勝ツキもは堪タカありしときなり

子とあふる 子成思さしめころや夫婦ハれうれいと

お母しめをりり

山のあそより 李王記天曆六年三月十四日付太上天

皇高飭 入道 延暦寺を皇位大僧部 下略

わりのりひて 女三宮ふひのまて静シヅカなる所より出せ家

もろりましとなり

ゆたうりるも 院号ありし時の天子より六上皇とを女

うしむり射ツコすなやいひとしゑのやを百ヒヤクの氏ウヂなるを

まられしとくしうぬ 西文抄の太上天皇の

物モノの装束シヨウソクは時トキをえら

上皇乗車 檣ヒリキ柳 朱雀院初也

出大内西条金飭キンシヨウ柳リウのころしれ末乃赤日アカヒかれすろ

のちのし

いとけよてハハ 唐カラ唐カラを世代ヨロト出デすを

うるりしとさ海 出デ家ケ行ユクまをさくしつゆの海ウミを

用ヨウさなり

くれてうれしを 海ウミ邊ヘ也

と院インをくれ 源氏詞

あめしころがひ 海ウミ道ミチ世ヨ乃ノ也

あふりりてき 一ヒト天下テンカの海門ウミカド入イるとなり

なぐらあめしとく 源ヒ心ココロ也

ちふりあすの むの人の志とよくめーせまうしきふ

のあまうもなげのあまう 物思集 心叶丸

又書山志丸

かられけーまてを 暫時サシトキまてもある

くあひの心さー 浄出家ソウゲ志也

さかふあゝぬ 女たれり 朱の血氣ケキと源れ心を

あーくえあ入り

清心乃うちあも 源心中

けふさ人より 源討ワタリ新代シノタ後ノチ足ヲたれをいのくとなり

一ことして一ことくして一事のこまむの

人としてはともあを 心持也

女乃血ため 天下をさうくひぬあ志なんも女三乃たれ

血事として老分てもいめくとたれ也

おさあつゑすう 志シの血ケ後ノチ足ヲ何ニりもおけくも忠切ユキた

おさあつゑすう

あやうにさうひうか 朱の血討

のあーへのたうー 忠仁公乃事世とれたもこせぬあ時

三皇ミツスメラ聖ミコト賢トモ集ミたれまへ 下略 源家ゲンケ天皇ミコたれとさうい子

あひかり

るれれこゆあし 日月遊ニギ矣 威不我トモナラ与 強ツヨク経

由教王一人 女文も親王ミコ下あり

せんさうして 志也

しまひす いたむもあやうしむまの
すくく 傳カガのこやうすと也

あはれいふもいふに ちかむもいふもいふに
ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ
中よりいふもいふに ちかむものほためいふ

しつるにゆきまひ 源のすまひなる也 書上れり
あはれいふもいふに ちかむものほためいふ
のほためいふもいふに ちかむものほためいふ

ちかむもの

母の 書上たぬれい也 書上たぬれい也
すして ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ

さくばり 勢よ悪人乃中よりさくばり

ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ

あはれいふもいふに ちかむものほためいふ

ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ

我ひふもいふに 源のいふもいふに

又書上れりさめちかむものほためいふ

ちかむものほためいふ 源と書との中を

ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ

ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ

いらふもいふに ちかむものほためいふ

ちかむものほためいふ ちかむものほためいふ

人わらうれたん 紫華ふじくひの事とあり

年もくぬりぬ 源四十五

さあしぬへろ 兵戸の拍者大納言なる事

とこれわたりひ 天下れわつゝむなり

五月廿二日 五月廿二日 又用子見女二日申の子目

くともむり 古今よ

葉つじむりの衣子み高き海つ

女醍醐は門の沙賀多門

り年のとけろとわらふよ

十二枝

新首殿逢かこめ

ゆき切り 又もまもりのめりさなり

南のれとくれ西の 六条院れ内乃もの敷れそむりれら

いてそ母也

り魚もろ 磯代 寝設おせりおきり下までまねと

たけつるま

りふとま 備家より ゆきとつり

は地じれ 地浦を唐越り大文高藤るり付るま

結鬘れ地浦と云を種れたくひ也 脇息事延名記

五蔭張大床子之膝上五沉香板息一脚

らてん 螺鈿 青貝すまゝ具也

夏冬のゆりうゝ 仁和元年太政大臣 夏冬衣裳又

五月廿二日 延長二年五月廿二日甲子壬子四

十沙賀父上皇被執之於若震敷有子儀末

女醍醐若菜養儀進三今案延長二年沙賀

醍醐の門の沙賀多門これを執せり

ゆき切り 又もまもりのめりさなり

新首殿逢かこめ

人わらうれたしん 笠傘ふじくひらう事とわたり
年もくちりぬ 源四十五

さあしゆへろ 兵衛の拍者大納言なる事

これわらうひ 天下れわつらむなり

五月廿二日 五月乃努ハ多子用子見廿二日申の子目

なりつしりのねをわりのやくとまひり 右今よ

あつたあまの野にまゝお茶つじりのまよみ高き海つ

乃才たし例延長二年は女醍醐は門の涉登多法門

乞と献きりくや也四十より年の三はうをわりのあふよ

せし祝也七種慈整養并善法形次と代佛を 十二種

新首殿逢たしゆ之

ゆを切り 又もまをりのめさなり

南の北とくれ西の 六条院れ内乃もの敷れをわら

いてを母を也

り魚をろ 發代 寢設おやうしおき乃下までまねと

たけつるま

りふとを 備家より ゆをとりり

は地じ記 地浦を唐延り久又高懸るり付るま

結鬘れ地浦と云を種れたくひ也 脇息事延法記

五講縁大床子之膳を上五沉香授息一脚

らてん 螺鈿 巻貝すまゝ具也

夏冬のゆうへ 仁和元年太政大臣が 夏冬の衣袋の袋

外具屏風を義経を四季也四十の宮小建四十教を用回
はくすうなり

いするうの教 四十の初はれを養せにとも也伊は
乃のさりなり

ゆすうけえ 浦照 多量のんたうい乃類也

あゝきの教をお礼草也

りさこれたの 造花を奉よとく老を叩くす心也梓及花

おろしきのゆきも 多つりひなりを但反又向けりひ

成りる也

とやびゆりく 心を乃おろしるを因縁也

うんの志よ 外は海へは出がさまへふ玉へ源氏對面也

らりん双

ひびくを 源氏人のねやともつひうこもよのよんや

たならゆく ちと

おろしきも 兩人まきみせぬんをいりくと源とを

の船ゆり

かりわりのと 玉乃腹三四歳るゆへし 勿論なり

うりわをりて花のきよのゆき二人存よた共未嘗 髪不敷と云々

たふ舟とつう人ちとく 一の海よま本柱の月 肥男子とつうあやまわり是いみまむろの ことなり 河津禊

まけけつるるりなまむろのちまもあまふ ことおろしのむらと川つとそとちちつりて 一いつ三四歳の子まきちうりわけりてい

まきくや 玉のいんまのゆきを指ひしる源乃よりひ

ちりけくしりわ夕ゆ子源よえせ勢もぬなり

五十一

外具^{クラダ}屏風^{マタ}を夏冬四季也四十の姿小遣^{コトシク}四十教と用回
作くすうなり

しするまの教 四十のむの初はれを養^{ヨウ}けに^ニと也ゆは
乃のさりなり

ゆすうけえ 浦^{ウラ}器^キ 玉^{タマ}臺^{ダイ}のんた^ンの乃類^{ノルイ}丸

あ^アき^キの^ノ鈴^{スズ}を^ヲお^ウ札^シ草^{クサ}也

りさ^リこれ^レた^タい 造^{ツクリ}花^{ハナ}を^タ臺^{ダイ}と^シて^シ老^{ロウ}を^ウひ^ヒく^クす^ス心^{ココロ}也^{ナリ}粹^{スエ}久^ク花^{ハナ}

お^オり^リま^マの^ノゆ^ユも^モ 夕^{ユフ}つ^ツり^リひ^ヒな^ナく^クち^チを^ヲ但^タ又^{マタ}又^{マタ}向^{ムカ}け^ケひ

成^{ナリ}く^クる^ル也

こ^コや^ヤび^ビゆ^ユく^ク 心^{ココロ}を^ヲお^ウり^リろ^ロを^ヲ因^{イン}縁^{エン}也

う^ウんの^ノ恙^{ヤス}も^モ 外^{ソト}へ^ヘは^ハか^カな^ナさ^サま^マへ^ヘ小^コ玉^{タマ}へ^ヘ源^{ゲン}氏^シ對^{タイ}面^{メン}也

夕^{ユフ}つ^ツり^リひ^ヒな^ナく^ク

い^イぢ^ヂぢ^ヂを^ヲ 源^{ゲン}氏^シの^ノお^ウり^リも^モつ^ツひ^ヒく^クす^ス心^{ココロ}也^{ナリ}

た^タな^ナく^クゆ^ユく^ク

お^オり^リま^マの^ノゆ^ユも^モ 兩^{リウ}人^{ニン}ま^マを^ヲみ^ミせ^セゆ^ユも^モん^ンを^ヲい^イく^クと^ト源^{ゲン}と^ト也

の^ノ船^{フネ}ゆ^ユへ^ヘり

う^ウり^リわ^ワの^ノゆ^ユも^モ 玉^{タマ}乃^ノ腰^{ウシロ}三^{サン}四^シ歳^{サイ}の^ノゆ^ユも^モ 勿^{ナラ}論^ロゆ^ユも^モれ^レ

心^{ココロ}を^ヲな^ナら^ラむ^ムゆ^ユも^モ 一^{イチ}かり^リわ^ワの^ノ髪^{カミ}不^フ数^{スウ}と^ト也^{ナリ}

若^{ニホ}ハ^ハち^チも^モう^ウあ^アつ^ツつ^ツめ^メと^トなり 河^カ津^ツ禊^シ

心^{ココロ}を^ヲな^ナら^ラむ^ムゆ^ユも^モ 源^{ゲン}氏^シ

ま^マく^クれ 玉^{タマ}の^ノつ^ツり^リま^マの^ノゆ^ユも^モを^ヲ持^{モチ}ゆ^ユも^モゆ^ユも^モ源^{ゲン}乃^ノゆ^ユも^モ

ち^チく^クと^トり^リわ^ワ夕^{ユフ}つ^ツり^リひ^ヒな^ナく^クち^チを^ヲ源^{ゲン}乃^ノゆ^ユも^モと^トなり

ひりりいかにいふ子備心ましん

人しりりいふ 玉鬘勢是才上り変とせされしりり

とけりき 業花物神上東門院より六十乃登とれこるひ

物りりふに性寺入道前太政大臣 如そへと依人なり

りきまわく山れ若乃松とや年出川まわく

うらへうらまきいふと也

ものくく一と ぬりりらふる

わつ家らとや 玉引つれてとぬ人子とてせりりき

おしく心丸とや乃志孫とと玉も源れ内親子也

せめく 毛井ての心也 源より 恥ぬふひら

まぬけりり 函玄く祝象計也

小松原言 源末を人乃頼ふひの事源と年成つまん

とたり

式Pのま 慧上父 お木権母也

清むまあの志 式Pののためゆの源 お木権の志れ見

弟也

外記番記上云物ル也

このりりそ事と 外記云 延長二年四月廿又日夜中

勢の敷慶親王以下日魚捕お片執持物也木権弟藤之類

或乞願養之相威小孫玉梅物枝打積物也女権菓子ホれ

入自日花門列立庭中 一列親王以下参議以上一列五位各

美相名記内膳の忠望卒膳部入自月華門受持物出

自月門 務相 献相 両侍 あんくれ物と云一氣の

源中北ありひとまにるん 双地

たのうへも せより書上れたるへるる

とれやのふ 女にや

いしらうもなる 女に文のつこもなりりらあ

ゆへ書上とまりし書上と源とるや

ひこみらふ 一向にこまむれおさなりきなり

みくひふ 一色ふるふりさかたとや

さもあふひ 書上れい

いそともなや 源乃清む書上様也源氏れ書上れと紙む

よいゆゆきとてふしむあや

おとそよゆいのるし かなとしてめく源むち

まぢりりきみて せより書上

あふもつりこよ 何も不入事とや源乃清むとてあ入

定ふゆゆあやうもよりきつりに理を定れとせんよ

や とまるき道理とれとまあや

いふうひなけお 定法もく何となくお解めり一終済也

あふちかき書上 費之集あ 女乃とやよりとせ

らりたり 秋終乃下筆もつあてめにちかきよあけり

人のむとそみる

いぢちうき 源自清面白きとや合をたゆらともい

わりのしあまきとけしあまをのけしひさぬち

れ葉もなり

とてしられ 源好交むもあめはさしきりあはれし一も書よ
ひととけはひりあらしくてとたり

つゝとてし ちま 悔むや

即ちあはれあまた 慧上討

頃心にのみして 各ま^{ツク}ませやも源北はひり一不計の
位とつひか三文乃あらしひ可^メ強^ナや源の意を自^メ到^ナて
きひ一も思ふたるとなり

且れもむあひ かしこ入むれあらし一もあらし一も書よ
れとあひ不^ル笑^セるむつひんとははれや

うと一も^{ユウ}程^ケ 智^チの人は一も^ヒやとさる

中^{チウ}勢^{セイ}中^{チウ}將^{ジョウ} 源北のこの女^メあし下^ノ乃^ノ津^ツあらしひりむし

まのこよあり

りある一 双 若^ニ源の頃心を明くしてを次^ニたしり
慧^エつつひあふゆへと双^ニは

うと^{ユウ}程^ケ一も^ヒやとさる 花^ハあらしハ中^{チウ}の心^{シン}のあらし

慧^エ上^{ジョウ}一も^ヒやとさる 事^{コト}あらしんと方^{カタ}一も^ヒやとさる 務^ツあらし
即^{ソク}ち^チ一も^ヒやとさる 慧^エ上^{ジョウ}討

我がまのの つつふうと思ひ乃あらし時^{トキ}をうの力をう
てんろれ一れ 源北を女^メの何れもと思ふおさりの
け^ケ放^ナても回^ヘせう^ウおさる一も^ヒやとさる せあらしひなはらし
一も^ヒやとさる

めくらの 不^フ及^{トク}討^{トク}書^カ

やまのやまなり ともねのやまをばやなり 梅のきりり
こもみし縁まやハゆく ぬのやたらあきとめれ
との独吟なり

た乃あまはる 子城隈こしろ隈かた於お於お街かみ報か祥さ前まへまま密ひそ

樂ら天てん雪ゆきののははてて暗くら痛いた也や子こ城しろをを小こ方かた城しろ街かみ々々ふふ事ことなり

まふ乃のけけみみやや人のの未み明あ不ふ定じやうるるちちりりををさされれなり

人ひとのの 夜よ寝ねととててつつととままををままなり

なちまもれ 雲上うんじやうになちこつちとままいいせせんんひひももち

我われよよんんななちちののここののああけけのの詞ことばままななららぬぬいいぬぬよ

ていしんいゆ

おとけて 源氏げんじたたししははささめめととややままをを縁ゆかりぬぬめめむむつ

ういあめや

ふさむかた人と 雲上うんじやうより女おんなおおりりいいととななるるし

めくくあけ入り

ふゆのりあへ 雲上うんじやう女おんな半はんよりううららななややああるるし

しし乃の縁ゆかりまま思おもひひてて雲うんののここののああけけのの詞ことばままななららぬぬいいぬぬよ

れぬよゆなり

ささかりひし事ことそそのの 雲上うんじやう

女おんな云うん上じやう

ゆまむく 女おんなとと執とししはは心こころなるるし

中ちゆう道だうととへへのの縁ゆかりののよよ中ちゆう乃の道だう也や 心こころみみここれれくくさ

ひろりつしひ取とりり持もちちぬぬへへるる 心こころははててややるるし

あは 淡雪ハ物と小人れひるるなり

やうて見せしめて 女三之乃山のぬりや結たすなり

紫上より 忍ぬゆへなり

友あつる 除初てなまの雪さうも玉の目のまはりの

ゆるるなり

ねとまさくり 文をけりひー花のたふひるかへ

神さうまふる 女今 わつれと神さうまかへ梅花の

とやあくのきなり

寫したるのくぬるるきなりひるよまてなり

女もよ 紫上へ女さよりぬれきなりけり時刻さうり

さんため也 紫上乃位は梅を用地らりけりなり

とさうり方まけ花にひけりなりと也 梅の香

梅の香よ白くせて梅の枝ふさり梅さうり女の心なり

あまのあまのよ 衣花さ開け梅咲と也梅咲ぬるも是

もくも思と也 紫上整巻よりあまの源氏自か

批判あり

あまやうお 紫上の神也

ひのつゆきて 紫上れろもみちさうりさすのちなまを

ぬれぬてハとけり

志り 志津半泣おとも女見せぬさくけりぬんとも

ぬれぬも只今既ゆくけりへも紫上へ梅心なれも見せ

ぬれぬ

さうれを身 因ふくもふく乃心 兼権より源をた
のこてか三波なりくきくはむ也 物れと下にも
たを婦人里めはとのまはくし

あそつるの程うー 廿三年のほどはま紫上れむは
延喜也

こと人乃く人なりい 源むか三つをびくハは延喜は紫
へくしり新をんものまをなり

今たたて 源の御孫神と尊也

あのはありま海 紫上りまををうれこそ源れはむ

一三婦人と廿三乃くこの女を前なり

よごらく 一しく一まかはくくはかあるは海なり

御そりり かもなくちりままむ

院乃くうと 兼権れく一は男く一かとる也

れつうふ 大もうたとやたうこそはははひ

ある人のま一はあひかともまをてとるは

なぬと世上の人乃事とつくと

者の心なすも 源は時善と撰はひ一能あつたとなり

まむたれはく ぬあむらるるまうこまも

とりくはは 一ふあまはあまうくまの理とる

よあれ思ひつ 一まうりまこと源はのひあまのり

とりくは心死せよ一まうるるもてんあふく一は紫勝

一あまうく可路と自漢の心なる也

申し給ふまじき 紫式部まの思ふまじき ぬらぬら

月れうらに 二月中におも

ひはらうらに 女とて源氏にむかひておぼしめし給ふまじき

院乃ちあしめとおあしんと 懐胎^{ハカライ}おたむ

おさる人乃 源氏詞

乃ち縁結ふま 女とて紫と母との御心はり

うむさひり 院あのみまよとておぼしめし せれま

めみしぬおほひいららぬ思ふ人うらぶら 縁ひ

やとておほきそ 子とての道しおとたり

ひとおいて 紫菫のむなしくおぼしめし せれ

成あつくおほし 免まゆへるま

うむくせ乃ち 紫とての御心はり 山の中へしおぼしめし

あつれりんの志 通名^{ツナギキキ}乃ちを承あよまよとて せれ

佛乃ち事りし乃ち志とての御心はり 具はあしらへおほし

世乃ちもさかや 次六れ事

とらく 討く

清あつひとておぼしめし 又なとておぼしめし

中細き びりれ中互也

昔よとておぼしめし 又志大長のみへく 誓^{チカヒ}にともし

源氏同心中なり

あつれまうれし 紫菫乃ち力上

たれぬそと 結撰 たれぬそと人よまうひてまぬし

ひ乃やんくんのあつらん

論評

まゝまゝのまゝ まゝまゝのまゝ

ならあーるのま ち今 村をたまひーるのま今あーる

しんはーのまもまゝあーあや びー馬をた討取

しーつふとまもまゝあーあやーせーせーまもま

不意振に涌る涌る羽羽也

志のた 和泉守た建たなり 和泉なうーれたの森乃葛

れ兼もみ校ふりりまてゆとさう思へ

女志も 些へゆとさう思へ

それゆへ 二条院の東院

おりのひあまする 羽勝まであらんともるがうー女三以故

をヨロツあひをトキ用ひる

あー法車 ひ下への時もや今又雨雨白書物書物也をつれーる

軽軽りるるー

おりのひゆとさう 和泉和泉寺寺調調法法也

それまうと 勝れひーちめくろろくーたと源思也

みあうーれたま 澄子澄子とかうくああて人乃不不通通経経ひー

て経和和とけり

おもふあま 鳴鳴と響響まあう魚魚とる 春た泥乃玉もに

あうふ増ふれ足足のゆとるま意意をすうれ

卒卒一一伴 電るまの事ー 元元元実実れりーめとぬ心とゆり

世 再

平仲子ノ末摘^{スミタケ}ヲ注^ツ

あまのついでに 陸子^{リクシ}を引^ヒけんとすむむなり

年月を言 中に陸子あれは海を圍^ミてゐる

ついでに

なみこのま 自地^{ジチ}候^{コト}なりとせぬ^{コト}なりハ

にまといふをこそしや ち人のありとまはけ

お坂のせもとくめぬりのなみこ

北^{キタ}のうハ 多^{タカシ}分^{ブン}源^{ゲン}氏^シを代^{ダイ}取^クとの事^{コト}又^{マタ}好^{カウ}友^{ユウ}のなれたり

を扱^ハ取^リとむるの心中

所^{トコロ}のやり 心^{ココロ}をさしめしむるなり

大^{オホ}やひわたり 津^ツ門^{カド}又^{マタ}大^{オホ}長^{ナガ}懸^ケ所^{トコロ}なりとめふ

ひたすぬ中^{ナカ}なりしとる

亮^{リョウ}ハとれ お色^{イロ}也^ヤ北^{キタ}遠^{トウ}

あのかよ 勝^{カチ}とるをさしめ

所^{トコロ}のこころも 源^{ゲン}の神^{カミ}をみて勝^{カチ}とあへて

見^ミゆらんや中^{ナカ}網^{アミ}をむす

所^{トコロ}のついでに 勝^{カチ}月^{ツキ}衆^{シュウ}を女^メ津^ツなやとあへて

官^{カン}ありてまじり

たふ 魚^{イサ}居^イ

所^{トコロ}のついでに 源^{ゲン}乃^ノ取^ク所^{トコロ}の中^{ナカ}に中^{ナカ}網^{アミ}をむす

そ

あうくしあふこと 物^{モノ}目^メ也^ヤ

志のみもき 源を處への事よきはるる

淵^ニ一をたるとしてなり くらに次たみ又をたれたる

はらぬる一入ふくくぬせり一を處へし

花乃りもの 源よむとけり一なり

力成りん事 淵也^ニ花^ニを一もたたりく^ニ淵^ニ

を波乃りし波といやふき一まてあふ事一なり

ま波もあふ一やも源のたたりく^ニとあり^ニ成^ニ

た地ま乃心なり

りやまのやのり 源の力と^カ顧^ニ也

冥守 一建ぬわり^ニ源乃^ニ同守^ハよひく^ニ一ふれ

蘇^ニはく^ニ

表をきく^ニる^ニらん 双

而も^ニり^ニしと 肉^ニ為^ニ替^ニに^ニあ^ニひ^ニた^ニふ^ニと^ニを^ニは^ニた^ニる^ニ人^ニと

雲^ニは^ニ清^ニ濁^ニむ^ニる^ニれ^ニと^ニま^ニり^ニ一^ニ好^ニむ^ニぬ^ニなり

又^ニあ^ニす^ニ人^ニと 雲^ニへ^ニ勝^ニの^ニり^ニ種^ニは^ニあ^ニら^ニね^ニと^ニ勝^ニむ

る^ニれ^ニむ^ニん^ニた^ニあ^ニら^ニぬ^ニる^ニ一^ニあ^ニる^ニ也

ひ^ニ一^ニを^ニ今^ニよ^ニり^ニあ^ニへ^ニれ^ニた^ニり^ニ乃^ニと^ニし^ニた^ニる^ニら^ニう^ニ一

る^ニと^ニり^ニた^ニに^ニな^ニま^ニり^ニも^ニう^ニれ 詞^ニ斗

中^ニを^ニた^ニる 源^ニあ^ニら^ニた^ニめ^ニを^ニ好^ニむ^ニる^ニれ^ニと^ニ雲^ニ乃^ニを^ニ中^ニ一^ニを^ニふ

ら^ニと^ニま^ニる

引^ニつ^ニか^ニや^ニし^ニて 引^ニよ^ニを^ニけ^ニた^ニる^ニと^ニま^ニむ^ニ也

何^ニも^ニ源^ニと^ニや^ニり^ニく^ニや^ニを^ニ勝^ニぬ^ニる^ニ也

註 三

わきくわーう 女三れは心わつゝけりやらひくわーの
れくまどくくまきあうひれあくくみ源心ヒコウ思オモあるあ
れさなりくわくくまきといんよう也ウレロニ後ノチ見ミえとわう
えのり

相壺れ源方 的の中へ十三文丸 心やきく源氏乃は
めこのはさあるくくくも信と心くくくくくもあなり

めりらーま 御懐妊あーらり

娘文の 女三文 東海

娘文の中乃戸 雲詞女三よは対オモシあくるんころる

ありのれえ 女三より明る上乃もはくくれと雲心中

とけのさ 相壺キリツホれあ

ものりーう 女三討

人れりる 源のどへけりるカキ過て用さる不慮事カキな

まはシカウニニシタウ後討返書あまことなり

かたむもあま 女三の神雲れは孫もんと源をチ取討ひれ

くく痛むあらんをくくくくし孫へ里

我よりりこれ人也をまきく 瞬心雲上も文乃は子なり

されとくくくみかこものくくくくくくくくくくくくくくくく

昔ころと才一くわもこれ又久く源くくくくくくくくくくく

まがくくく聖念乃心ありて源れまそたてけりりあり

くくくぬとわ月一めまあく後り

あーハ月のかを 女今席イシの志シ言コト吟ウタ ねとまら 女今那

とおめをれつうひよはのふるすぢくぬく物と也
文女清の志 女三と桐壺となり

於らくひなくう 紫上と源の足ゆひてのひを玄三

より今年ハ面白也

てなく 上もともみして所をの足るなり

かにちぢく身 紫乃の羽おあそりーの身の

源のひれおをれと念とく也 鳥家山姥の

夏浮橋にもありと夏山なりし 白をきうりし

るるとりありあをれち紫の山れえけみ建し 河

火鳥れ身 源のひハぬあはぬ不變なる物をくま

きーとととられしはる紫れはむ中何とやらんうと

とち秋中の源を不務と也水ももまねとよまんため也

しふゆきて 紫上下乃ひくくみゆらとよけら行

く紫とあつうくく思る也源乃清じ

こよひを 女三又紫と西對面より源の足疎るれハ勝入

清出しなり

紫上の清くこそ 的る娘志 赤文乃女流なり故の名

的る上より紫と赤乃れやとれり一也となり

ひり乃 女三と紫とゆうととあつとあ入る

おろのう一は 兄弟と云 紫上乃又と女三乃は母と

兄弟也のさしとつよまうけとて麻なや射とらんり

是を兄弟とらんりわ

おしとあなひもころもろいよひる〜 女ふか
同観の書を平一人と早がや ちのぬらぬらとあふ
の〜はあふ〜のぬらぬらとあふ〜のぬらぬら
やそ今イモ身ミ業ノもなる〜成向ぬらぬらとあふ
〜ぬらぬら

たのゆさ 中納言詞

ろむさ 朱雀

あ〜さし 白ぬい〜ぬらぬらとあふ

ちう〜さし 女二〜えつ〜のぬらぬら

ゆ〜あ〜ひげ〜 朱雀より書入セウクははぬらぬら〜

ふん

ひいなヒイナのす〜 書上カキネみ今イマぬらぬらとあふ

ち〜ら〜成ぬら 書上カキネぬらぬらとあふ

ぬらぬら

りかリカも〜 源乃書入コト志シと一入イチみぬらぬらとあふ

てもぬらぬらクキロシキ

あ〜ふ〜げ〜 女三と書と中〜のぬらぬらとあふ

ぬらぬら

非月ヒツキふたいの〜

源氏ゲンジれぬたぬ書上カキネ乃ノぬらぬらとあふ

あ〜れ〜海雲ウミクモ 見松ミマツ風巻フエマキ 源氏ゲンジれ建タテ立タテ清スミ福フクとぬらぬら

業ノ佛ハツ 奉命ホウメイとぬらぬらとあふ

ほろけ経るこらむ 借費 法例 河海多之難之

ゆきまよ 老字 書大なる心也

おこへハまほひ 雲乃のさるまやれ面白さなりしるを

糸流あり 東文中よりゆけりあるる

ゆきまよ 二年海年一月五日忌とまむよや法志誕生

日元 源氏西月もむつろり乃日廿三日るる

法事き暖家もてや二条院まゝまよしけり人日

高く六條院まゝまよておまぬありのわくくのぬんれ

まは二条院まゝまよや廿二日を西月子日中もあるる

ゆへり二条院まゝまよ上わひまぬあや廿二日源清延十日

元年忌あてなり

たのともを 野屋やも

院司 六条院司

らそんのり 侍子とたのりるるる例とほほふ

らそんのり 花平七年十二月十七日湯成院 源天會の号也

源氏為太政大臣の成 西才一の男五所衣机八条 堀尾繪

五所服昔八分添るる心巻後

肉の心を ねむる けさるれらるるるる

うきこれたの 永祥三年仁明天皇回十所衣機抄歌其

造沉香山以金為鴉介舎の梓以花

ありれぬるる 桐壺のうきとりけゆへぬる上のさ也

ありれぬるる 桐壺のうきとりけゆへぬる上のさ也

ほつじけ経しこらむ 懺賞 法例 河海多之野之

ゆきまよ 老字 老字なりむ也

おこへハまほひ 雲乃のさるをこれ面白とにりしるを

系流あり 東文中よりゆきまよなり

日元 源氏正月もむつりつり乃日廿三日るを

法事きつてゆきまよ也二条院よりまよなりゆきまよ

高く六條院よりまよてゆきまよなりゆきまよ

まよ二条院よりまよ也廿二日き正月子日中もまよなり

ゆへり二条院上りゆきまよなり廿二日源清延し日

元年忌ありてなり

たのともを 齋をせむ

院目 二条院目

らそんのり 侍子となりるゆきまよなり

皇土皇村とれ外き不重 源氏皇村の号也

ゆうれゆく也 承平七年十二月十七日陽成院法親王

源氏為太政大臣ゆきまよ 西才一の号五法衣机八条

五法服昔八分法まよ也

肉乃むき 物むき ゆきまよなり

ゆきまよなり 承祥三年仁明天皇回十法衣ゆきまよ

造沉香山以金を鶴介舎ゆきまよ

ありれゆきまよ 桐壺乃ゆきまよゆきまよ

なまむら

まづ此四季の志 内約れりし乃た大将殿おるの四十
春一ひる時に四季れ志のきりきり一りの屏風
うささききりきり お今ふあり

せんすいれん 遊、庭れたんせ 山水なととと
終く成りまらる

四十作をきて 四十遊によまり

万ざいりわうざやう 延嘉六年十一月十日 津波をよき

三ノサイラダ 第歳系 次藤合樂次空摩

あふららんやう とうらいの系系乃らつれ時の樂也

控中細之 夕雲也 柴門持拍

兼人の落隠よ兩人あて入縁と兼乃へり

入あや 兼しけり時のて也有取縁半お目入縁 河

けりさ位 若おあまの町を源氏へ中おお仕き取申お

けりさ位は花昔のおおれ其の時に源氏の中おれ
江のいり中おれ其の年つふまうけ今の夕
吾の控中細まうけ本はあつ替りうをえと
かの政和院書上の家目之女房といかのう又か
のいれを人よりうていひかたり書上はた
源氏の室家のおほいりうかのいれといふ
るにうあんや

心也
いの人成也 水政不執持国
後、吾而ヲ堂上云心也

人へひきて お 人へ成つれてけい心の將軍

と云向乃びなり

ふとせとよめて けり流田れくつらぬあはよや恒鶴

のうらぬま川よわまむけの 恒はるるく子と

たふちり

まつれ四季の志 内約れうこ乃た大将殿おむの回十
奪しひる時に四季れ色りきるううの屏風う
うささきさきるあ お今ふあり
せんすいたん 遊、庭れたんや 山水なととさう
終く成りまると

回十作りきて 回十空によまり

万ざいらくわうさやう 延治六年十一月十日、津波をうき

ミサイラダ 第歳系 シラカワラク 次藤合樂次空塵

あま乃らんやう とうらひの系燕乃らつれ時の樂也

控中一細き 夕雲也 柴門持拍

兼人の落穂よ兩人かて入緩と兼人の里

入あや 兼しけり時のて也有取緩半お目入緩 河

けうは位 諸おあまの町を源氏へ中おあ仕き取申お

よそ舞踊ひりなり

まけえらう 五折くらたら心也

水の政取 別家うこれ中絶の人成也 水政取執持園

三 けしう後お書と号也 女房、飛石、堂上、心也

人くひきて お キイ 人く成つれてけい心の御軍

と云河乃びなり

ふとせとよみて せし流田れくうのあまはまや佐鶴
のうあま川よまむはらの 一 佐鶴くうく子と

あまの川
佐鶴くうく子と

せどつひてそはうひのく^二 河不引也

あの入道の文 世七のころに^一文はとうへんとうとせし
はるりの

このぬん 密シツクこれ父と思はゆへに母文をなくするは
ひにうりてかりへしと申てあつたもなきい
りしとがり

七六寺まはるり 延長二年天子四十等布四十端十二大

寺小補フシと修シユせしり承平四年三月廿一日

七六寺東西延暦極樂寺シユキョクホ多法フセ補ホ經キョウ布フ施セ東大興福大

安業アンギョウ師延暦寺シユリヤクホ多又百端ヒャクタン西大津隆シユウリョウ東西極樂キョクラク寺各四百

端タン奉ホウ為メイ市文息災延命也 元 四十とちりて又都の四十

寺の在る不定本願寺ホケンありきりされ

はるくみと申文を 源氏涉セツとくしなり

あり文とくは是前 二本おとすまさは源氏の文とあり

そはれ親まをい也 又發二本おとすまさは源氏を

二親れのりりてきてふと思はむ

ろし四十二とくは源氏ゲンジ世上セウジヤウ遣セン

四十の災と云ふは花耶宮公の貞観十七年四十
災一始てみ十七とて災と貞信公の延長十九
年四十災ありて七十とて災とくは例も
あれと多かろうとてたやうとくは例も
かきり

大やけと云ふ 乙事しめれとて面むまの心の

ま乃おとすま守町 六条院れぬひはしりぬの町好方

されくは 西き玉うつり乃の月れにとまむの又むの

一れ大やけと云ふなり

たのぎやうよ 玉つろ 堂上乃夜よる録ひのつろ

大饗食よりすくへて 元正月二日二文大饗食奉

西宮元之大御衣白大褂二領中御言同色二領
緋紅大褂一領北条緋四領柳色合小褂一領五
位細七一連云々延表中宮式云親王以下大御言
以下名白褂衣二領中御言三領系緋白褂衣一領
北条緋三領并四領系緋褂衣一領又位緋一連高
唱四位又位名賜云々
今案い御聖の中衣のせきせはつるよりりておほ
やきよりなるすつて親王以下御の録大饗食の
例と用りり但其色目いりるすも亦も大饗食の
いりるあつるく右右のいりる御聖の
の御聖の録のいりるよりり

大饗とて毎年正月二日
の撰より東宮に饗あり日門の
白ふの御衣也
又位に依り

鶯野天 碧野云 河

こせりこせり 河母御息所也

ひりー御経のも 七六も四十寺あといり補經地切法後

韓物落丸形 我形 中形

昔の流より花七六寺四十寺あといり補經地切法後
と施入せられ又延長四年二条院の御聖の朱朱
の御聖と懸給の御聖今これの御聖と懸給
御聖よりりは御聖の御聖よりり史記皇子あ
今よりりは御聖の御聖よりり

四年二条院に御聖の朱朱

河説不用 才一とせり

あつるに ことの外るはと云詞

中一細をあそつあさせ 源氏輝一はひにりり夕芳

るは物たりり 約章たるとはことなり夕芳とこれ

はあふりてはこれ後式ありる

お大お 班やもなり 夕芳お大おに成給へる

おろしこふ 又一しこふをあてと也 芳字心丸

とへりり夕芳れおらひれとる

の町 花巻の町

たのまやう。玉つらつ。堂上乃夜よ。を録むのつら。るる。
中一丈れよりある。

大饗之事 中東二丈乃大饗とて毎年正月二日。

大内れおの玄輝門乃東の横横とて東に饗あり白門の

西一丈中支の饗あり大内三丈乃饗也

まうちをこぼり 大内息意也 又位に治せり

あーさー 香箔せたり

名たりのむわい 赤必録云 韓鶴落英形 我形 虫形

鷲西天 碧意云 河

こそしこう 河母御息下也

ひり 柳経のも 七丈も四十寺おとく 河補経地切法後

と施人さくれ 又延長四年六条院に法堂のそ朱雀

此獄シキリとく賑シキリのりあり 河院不用

若もえ人小地と施事オ一とせり

あらしん ことの外るはと云詞

中一丈をみそつあさせ 源氏辨一 経ひにりり夕書

る 此物ほりり 約章なるにことなり夕書とこれ

ハあふまて夜に後式ありる

お大お 雅やもけり 夕書お大おに成給へる

おりこころふ 又一くこをまをめてと也 芳字心丸

うへよりよて夕書れおもちにれえる

うへよりの町 花書書のゆ

手書 世 手 書

手書 世 手 書

取くれきやう 内裏よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院がやより 變心合符と沙汰あり別院人久重
おんあつらう院

あつらう院の花あつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
人あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮

行なり 双乃庄
若海

の但方よともまをり 尚今乃内寄を仕物付よる
うもはれんよ うもはれんよの 是をた乃事一の
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮

あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮

次乃馬寮御衣 内裏よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
大馬立乃御衣 馬寮西面御衣

長八院より今を大内よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
は例次大のひかり延

あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮

恐と報するも心丸

あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮
あつらう院のあつらう院の中よりとこもはれぬ 御衣を必置寮

取くれきやう 内裏よりとこまを移し 御衣を必置寮
あくろ院がやより 變心合符と沙汰あり 別院人久重
とあつていふなり

にふさお母と 依勅各条行あり 双乃庄

とつとく ちくともせや 若海

うら乃ゆてのくせ 依ていともいふ心也 主上乃宸筆の
の御衣ももまると 當今乃御衣を此物付と

とをばんよ うとたふれるの 是をた乃事一の

のくせゆ人れ自うくたあややふむる

由馬田十之延也 二年四月廿二日 自多院 此書は
裏院引出物 涉る田十之 入自華門 樹人 大支 退出 並朱 駢之

次乃馬寮 内裏より上置 石馬取

大島五ツ太は 馬取西面 け御衣大のくひり延

長ハ院より今を大内より六米ふへりこまなり

つまくよう友人 たちを清府 たち共朱府右 染門尉

河原の森略之

まんざいらく 安王君 毛乃懸と報するとも心丸

馬とわくともに樂あり

幸さほけり 依ほつうのゆくを察よりさつり也

ひわハれ井の 既懸ハつひをがさの共也

年はうひ 源の年其合點めされしなり也 再身一と也

わめん 西平四年二月九日 在申文治夜 貞信の記

不及^{ハズ}歸^ル退^ク出^ス遊^ブ歸^ル并^ニ色^ニ邊^ニ和^シ琴^ホホ 中^ハ乃^ハ亦^ハ業^ヲ入^ル草^ニ二^ハ命^ニ
比^シ例^ナ打^テや^ナり^テ強^ク不^レ討^テ共^ニ死^スの^ハれ^トあ^リて^ハ玉^ヲ義^ヲ棄^テ
由^リ汝^ハ有^リと^ハび^テ入^リし^テに^ハも^トも^ト也^ク退^出ゆ^ハと^ハい^ハく
此^ノ業^ヲ入^ルと^ハい^ハく^ハ牛^ノ中^ニや^もと^也
由^ルむ^ノの^色を^りて^ハ じ^ウ魚^ノと^ハも^トも^ト也^ク由^リひ^ノの^道たる^ハ
汝^ハ馬^ノを^うき^とる^事あり^也

ろくよう昔

汝^ハく^もも 大^ニお^りり^た才^ハも^也り

由^リ来^ス一^ノの^ん 一^ノ院^ニ之^ニ未^レ在^リ院

身^ハさ^ハい^乃ま^秋好

あ^のも^のわ^れの^こ 中^ハま^を今^を沙^威之^勝と^らる^ハ

夕^暮を^平人^母建^レい^との^り来^と見^せる^ハと^也

さ^ぬく^るを^まる^も華^とも^とり^り

こ^のの^人 花^を

三^条の^水方^立井^の石^立

よ^の乃^る乎^か 花^をれ^はあ^うて^そは^り夕^暮乃^のも^也

ま^ん妙^へも^きふ^乃の^所を^まら^れも^ゆく^しれ^とや

と^のの^ゆり^ぬ 源^四十^一

ち^うり^のま^十四^支 相^壺内^壺を^らの^所く^まる^ハ

ゆ^くし^とは^とは^の乃^くを^本と^もま^ひ也^勢上^れれ^業也

ゆ^れく^も 紫^上等^の所^産け^り

雨^のの^るて^ハ 御^施せ^る雨^の乃^のの^雨の^のる^ハと^ると^也

このあつた所町 小乃野

みもほろ 名目よんやをいひ

かけ入るて 明る上の母

あの母えい 的る上まういほふとけり

りの糸 中 之産流ひりゆ人者上流もわ

的る上をば流れ事かたまつ後乃りしきんれん

世人 的る浦まで懸てあゝ可まとも

お母と流れ人出 双大やう包いんとけり

仙人の 目中

沸しこぼりし 的る上

因なき 娘志因みのけしめあふことなる

くまうやしや花やより木のちよりとけり
のつりまもみものうらひさうぬまうとけり
あり

あゝ 女不夜路も

さうほろり うれ程もふされと双ど六十又とよむ

ありうふ さまわりなるむ也

むのうらつふまを 明る上む若うことまのらんとけり

まのらんまや 瞬もを

位位とまそめ 位れかりもてく若浦煙をチーさんと思

ひーと的る上む

れりまつあま 明るまてまゆひーとて流る城なるま

つへあめあゝ縁とけり

このあつた所町 小乃野

みとほろ 名目よんやをとりふ

おけ入るて 明る上の母

あの母えい 的る上きうひほふとなり

わのゑ 中 之産流ひーゆへ者上流よわ

的る上をば流此事かこまの接りつてきんれいなり

世人 的る浦よて懸中あこ可安とや

お母と流人お 双大やう包いんとたり

仙人の 目中

沸しこ海つらと 的る上

因だや 娘志^{ヒキ}因^キの^ミら^シま^シぬ^ルこと^もあり

きうくよ 春とや

うりおそしと うりおとてと云ひぬ

あつた 家及陣とや

さうはうり うれ程もふされと双と六十又と云ひぬ

あつたうふ さまやうなるひや

むらうつふまや 明る上心若うことまのらんとなり

まのらんまや 瞬も^{ヨル}も^{スミ}可^ク也

位位とさそめ 位れかりもてく若柳煙を中うんと思

ひーと的る上心や

れりまつあま 明るよてまゆひーとて流る城心あるま

つへあめあつと縁とたり

あまのつらさをよみ くらげと成る娘^{ヒメキミ}にたのしみとて
めくもすれど 玉用とらんともまをよみ^{ヨミ}也

都のなまを ありけとへまおしとらん^{ヒメキミ}のむらやも
厄も中と也

ひらのせの中 ありし玉用只老人の万事用^{ヨミ}也
志がこねの事 女流 心明也

母成まてく事 世をまてく^{ヒメキミ}のるを明なる心とて
玄なる子とてあやもそと^{ヒメキミ}个道乃事とてあり

夏乃るうお 月しりてられぬとくらあーも
別りん曉のすも花は^{ヒメキミ}のくれ入るよわ
曉のすいほとく^{ヒメキミ}とてあやもそと
なると^{ヒメキミ}あやもそとわつらん

のくれあやもそと 目えよれ^{ヒメキミ}のるれをなり

あらのえ 外格へちき也
のひあやもそと 厄^{ヒメキミ}乃ためよき^{ヒメキミ}ひあまともせり

本行建はとる也
たのうへも 紫^{ヒメキミ} 娘^{ヒメキミ}志へ也

あらしあやもそと 産^{ヒメキミ}産^{ヒメキミ}目^{ヒメキミ}の^{ヒメキミ}者^{ヒメキミ}向^{ヒメキミ}紫^{ヒメキミ}九^{ヒメキミ}改^{ヒメキミ}改^{ヒメキミ}白^{ヒメキミ}紫^{ヒメキミ}
中^{ヒメキミ}改^{ヒメキミ}也^{ヒメキミ}女^{ヒメキミ}房^{ヒメキミ}亦^{ヒメキミ}者^{ヒメキミ}也^{ヒメキミ}向^{ヒメキミ}蒙^{ヒメキミ}唐^{ヒメキミ}改^{ヒメキミ}之^{ヒメキミ} 下^{ヒメキミ}略^{ヒメキミ} 産^{ヒメキミ}本^{ヒメキミ}小^{ヒメキミ}

そのろを思
まのうら^{ヒメキミ}の^{ヒメキミ}路^{ヒメキミ} 紫^{ヒメキミ}上^{ヒメキミ}う^{ヒメキミ} 流^{ヒメキミ}子^{ヒメキミ}か^{ヒメキミ}記^{ヒメキミ}る^{ヒメキミ}也

ひらのう^{ヒメキミ}げ^{ヒメキミ}お 誕^{ヒメキミ}生^{ヒメキミ}れ^{ヒメキミ}系^{ヒメキミ}乃^{ヒメキミ}幼^{ヒメキミ}稚^{ヒメキミ}と^{ヒメキミ}く^{ヒメキミ}あ^{ヒメキミ}ま^{ヒメキミ}と^{ヒメキミ}く^{ヒメキミ}せ^{ヒメキミ}ま^{ヒメキミ}也^{ヒメキミ}

とて志 明^{ヒメキミ}心^{ヒメキミ}上^{ヒメキミ} 今^{ヒメキミ}あ^{ヒメキミ}ま^{ヒメキミ}乃^{ヒメキミ}所^{ヒメキミ}た^{ヒメキミ}め^{ヒメキミ}う^{ヒメキミ}を^{ヒメキミ}なり
春^{ヒメキミ}又^{ヒメキミ}の^{ヒメキミ}せん^{ヒメキミ}ー^{ヒメキミ}なり 意^{ヒメキミ}与^{ヒメキミ}改^{ヒメキミ}ま^{ヒメキミ}く^{ヒメキミ}今^{ヒメキミ}も^{ヒメキミ}女^{ヒメキミ}有^{ヒメキミ}所^{ヒメキミ}内^{ヒメキミ}約^{ヒメキミ}の^{ヒメキミ}也

西事百りなりよふ 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

めくもすれ也 至用といふも支も不入也 都の^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心も中至と也 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ} 唯^{ヒキキニ} 心物と成る^{ヒキキニ}

いとうのみたるなり

返むの返申よ 延長四年六月一日 野原屋敷見 村上

天皇 内侍在社内湯 大系前湯 荒

うらつくれとを 明る上乃 振舞可然と内侍の心中也

入るれぬと内侍と云ふれをうと云ふもさふと云ふは

六日とのふり 主人乃 改題なり

七日の兼肉より 延元元年七月廿日 兼肉院 延元七

日乃 返うふやうい肉よりきうれは前れ袖を振舞乃

小巻六前 銀の鬘馬 盤やうの物と云ふゆらるるうら

き年さぬわら 基辛九 浅又十 或世愛亦多くあつと

兼入の人々を女の装束以下人うらうらとて是と返らう

連は返うふまぬ一りさねむはえ一重打をそるる返奉

るると今肉より兼肉院れりつとよきせ返り合 返り合

返り合とを兼人うらへ返すらるる返り合 返り合

なるる

肉乃乃おすめりささを 肉くのるすまきひひとらん

やうまなり 外振むまことく一れとや 双るを

今まてんきぬり 返り合を大返うなりひなり

沸くこの返むをまて める上 にくらうおまよく巻も

なくひき返り合を返らる

ゆも切りゆらしなく 返り合とめとのひひみなり

らうくくしを

文の涉せくふ 月の文法カキマツ極キマツはよりりるる

あまがの とうとうのふもゆ

ふいぐり ちあろひなり

わりの文法見たてあつらぬアキキミ尼者中ニキミまを乃やのふとみぬ

と也ス此ス今ス極ス生スれス互ス文ス祖スいスのス

あーこ 陽うこといふひ也

すあーの抄不ス行スるスるス 月の文法極生乃ス也ス思スひス

に今スひスるス海ス是ス一ス入スるス深ス志ス也ス

の月をさるるとも 今スあス後スもスあスくスとスなり

ここのかり事スるスるスてスを わざとを系上スさせての月ス明スるス

上へ又ス減ス書スてスやろスとスなり

あの年比ハ 入道文云

力をくさるるやうふ ちやう一ス世ス中ス一ス人スをスけスるス河スり

さかハ世ス一スるスれスやスうスなるスとスなりスひスりスとスなり

目のゆと海 ちよもなるやもくれ又ス子スをス目スれス涼スへスとス也

月のれとやむきんけん

已ス規ス因ス果ス經ス云ス三ス善ス之ス佛ス 乃ス燈ス灯ス之ス異ス者ス 出ス與ス下ス世ス亦ス可ス慈ス惠ス

仙人あり 中略花ス一ス委ス

龍ス之ス善ス之ス如ス其ス漢ス曰ス善ス外ス汝ス以ス釣ス也ス佛ス被ス劫ス而ス得ス成ス佛ス号ス曰ス

釈ス迦ス牟尼ス也ス時ス善ス道ス投ス佛ス出家ス回ス去ス世ス也ス我ス能ス得ス住ス不ス修ス奇ス

者ス一ス志ス者ス外ス大海ス二ス若ス者ス執ス次ス次ス之ス若ス者ス法ス衆ス生ス入ス我ス力ス内ス

四ス若ス者ス執ス也ス又ス若ス者ス執ス也ス唯ス願ス世ス者ス為ス我ス解ス脱ス 善ス克ス

卷之六 海若汝在生死大海之中 爰就汝若出於生
死爰就汝生入死方内若為他後依處 爰就日若智支善經
爰就月若清涼夜半令離熱惱 爰就緣乞汝將來成此之
相 吾道已不勝踊躍 大藏經辭字函

今初經小山人所取者 吾道仙人乃又修乃爰をくきうり
女事一たりふ所り 但うれむきりしける事ありし
先次汝を梵經より 蘊達廬山唐より 妙高山と云 回室
と云つて 行く事ふりりて ありと云 此より入る 八万由
旬 此城出 事八万由旬 念十六萬乃山なり ありりて
すとをめ付也 東也 南也 一 甲州あり 日月を山の 東也
めくつて 畫報とて ありと云 あり 明也 入るの 爰をぬる

上むまふんとす 然れ爰とく 入る ありと云 是を合せて
つとす 此の山ハ山よと云 きてきう 人なり 山をたぬれ
てよ ありと云 女をそむに 行く所と云 是れ 明る上
と云 ありと云 山の ありと云 日月れき 出る ありと云
月を中 ありと云 日ハ 春まよと云 ありと云 是れ 明る上 乃 女 中 文
小立て 縁あり 東まを 生 縁あり 縁也 ありと云 ありと云 山 下
に ありと云 是れ ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云
業 荒を びさあり びふたれ ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云
よ ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云
と ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云
に ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云 ありと云

てりしを入道般若の舟よき不ありて生死の海をわく
 こそ西方極樂の岸ありて行くまにたるとも現當二性の
 輪廻成就して日出陽也善哉仙人の教よ次修日月を
 見たり人其事を善哉佛よこれあまをわくせはるる願を
 心お遠きりとひくともをれくその教求ふ乃成就せ
 る事ん世間の利益こと也との意をすへて是は可
 也又玄辨の義を深夫乃前よ次修れ海の中ありて
 善哉とて意を待にあり又善よ月日返香とみれを貴
 子をよともひへて善ハせぬ善習乃れまふといへども
 仏も教へく善をもつてたるとして流れて記録入りたに
 は次乃訓中も肉をたむと為す中の中も善を信とへま

事多ゆと云々 花鳥歌可読る如し用也

ちしなよとぬ 善哉なりしはたてて存分なりとれと
 なるにちししと國へおそみて下しとたり

と衆中おるこししと守り成るとも掃本堂もあり
 わり善と 石の上

うありたりしとふ 善いも訓はくまひ子ありへ
 ししよとく可切

國のくくと 申文をとも母といわり天子成たり
 かりあり申人なり

善のゆとれありし 善文抄 善とあり
 まれふありし 阿修陀經

後世の四方に十方信託を在りて其名曰抄葉

ひのあつとらと 泳陀真達也

水草まゝに 漢語の代に玄實を信託しおされし

町官牒樹よりしとみて身と稱して深山に入る

身。牒状と云は上ヨリに信託と云也牒と云と云ハ書ノ心也

と山國をあるまゝにとまげを教れうらハと海す

まゝにける ともきぬつハやとめ字

僧部号の色られしと

芝いてん身 志文世をたけら終るへまげり

又を八道書より明しおむむくむともいへり 呼

月日うまらと 女乃がこへの文まゝ今日と可云と也呼

のあつとらと人乃らめをりる け候不別有也

明石八道と家入をるのひまゝ又子悪をれは候と

むたぬいあへり人の濃きる友衣也もやけり

ま由を遣ふ一侍連と教書なりと漢飯王乃金指と

ゆふ国書又母乃たぬ下蘭蓋とまゝの侍連的るれよ

の扱方よりあつとらとてうれ忍と報をんしと候

おももあつとらと但我身を變化乃物とおひなせと

た中一の地堂をまへりとも

の何しう化せなやハもとも

しん今の變化とまを佛并れ親力或を定方よりりて

魚代業と感してうらとめれけらと現するあり

お云四生の中其他生アヤニリと
早の中れ化生ト花アリ

後(リ)の(方)は(十)方(億)の(人)を(世)界(名)曰(佛)衆(ト)

ひの(あ)ら(ま)ら(ま) 泳(ニ)陸(ニ)其(カ)遠(カ)也

水(草)ま(ま)ら(ま) 漢(サ)の(代)小(玄)賓(ト)佛(衆)を(佛)都(ト)り(お)さ(れ)し

町(官)牒(牒)樹(樹)ま(ま)ら(ま)と(み)て(身)を(佛)と(稱)し(て)浮(山)小(入)ま(れ)

身(身) 牒(牒)と(云)ハ(上)ヨ(リ)れ(れ)世(世)と(云)也 牒(牒)と(云)ハ(書)ノ(心)也

と(山)國(を)あ(ま)ま(ら)ま(ら)と(ま)け(さ)れ(ら)ら(ハ)と(處)す

ま(ま)ら(ま)ら(ま) と(山)を(外)つ(ハ)や(と)め(字)

僧(教)号(の)を(あ)れ(し)る(ま)

ま(い)て(ん)ま 志(文)世(を)た(り)ら(終)め(へ)ま(け)り

又(を)入(道)害(害)り(明)も(む)く(む)も(り)人(王) 呼

月(日)う(ま)ら(ま) 女(乃)が(こ)へ(の)文(ま)ら(ま)今(日)と(可)云(と)也(呼)

の(あ)ら(ま)と(人)乃(ら)め(を)り(る) 比(後)不(別)也(也)

明(石)个(道)と(害)入(ま)る(乃)ひ(ま)く(又)子(悪)を(れ)ま(後)と(く)

む(た)め(い)あ(へ)ら(り)人(の)深(ま)る(者)衣(也)も(や)け(ら)ら(り)

ま(由)を(選)ま(ら) 佛(道)と(教)を(め)と(演)説(王)乃(金)指(と)ま(ま)

め(小)同(意)又(母)乃(た)め(下)蘭(益)と(ま)ら(り)佛(ま)ら(的)の(れ)上

の(扱)を(ら)ら(め)と(ま)ら(り)て(う)れ(忍)と(報)を(ん)と(ま)ら(り)

那(も)も(あ)ら(ま)ら(り)也(但)我(力)を(變)化(乃)物(と)お(り)ひ(な)せ(と)

り(人)乃(と)河(海)も(ら)回(生)れ(中)の(地)を(ま)へ(り)と(ま)ら(り)

あ(れ)と(れ)と(人)界(ハ)劫(初)乃(回)ら(り)化(生)を(や)ハ(ま)と(み)し

よ(ん)今(の)變(化)と(ま)ら(り)佛(并)れ(力)或(を)定(力)よ(ら)り(て)善

悪(業)を(感)して(う)ら(ま)め(れ)お(ら)を(現)す(る)も(り)あり

one the

變易して死と生きとりのみ也布袋和尚も修勤の變化寒山
十海を文殊菩薩と云のしし明入道變化の神とい
むるやうにこれして可證なりんらんとし一花可證
その外れ岸よ 善導大師乃護子

惣到深院を養專還本穢心為人まむん

十四日 念のうらふら

くろおふりとも 薩埵王子飢席为施し給ふ 心象不語

私 比因は席にけまはくすと云ん 力を捨てぬみ入り
我の建てし海乃はくともんくともんを忘るれん

せしめりん 施字 けとこひりり

あふらりのけりん 海云也

くしたる哉 深山成し 後孝人倫終らるる孝と可むん

いつはハと 出家ありけりなりさそ終らんとかり

せふり 転入

およびん 處分

おん處 支ま處心の別は心也

佛に沸く乃仏雖滅る在具山の心と弟子ホとるら

滅度れ時款し事也尼公乃心は余ら 席不

仏は寂滅度ぬ新畫火滅と云むなる海なり

清く 的の上

おもくしや 尼者と明るとの對面とする

おろけけりて ね海なるるなるなるなるこの心の

物種よりぬはふ所——より詞多之

ぬはへる 尼悉也

めとくむま——よふ人さあめ^{アヒ}とあ——やなり

ひのむよそ我力を へるれひの心得まくむたかくけり

まれし——のと思ひ——と我今思ふはへる

悉れ法とくまを 的る上をき——て尼悉の詞

いふせ死ねりひを 源の——と——と申は尼悉の

得しとなり

勢成とて—— 入道幡州守護に成て下る^ルもの上は成りぬ

むらりのあふりとる

るむまに——世よ 的る上と源中沙^{サキ}舞りぬ又宗へ上と尼

悉中——ぬへる

うひあふ 申^シ文^キ為^キ文^キとまうけはるなり也

うこつて—— 明るへるをさむ 尼乃詞

せふへ——ぬふ 世よあふりぬるうたうひ——心^{ココロ}持

かひの——とるなり

もうのまら 尼悉と入道とゆふ——なり此勢成りへる

うまひぬぬる 明る早下也ぬひ入道源者^{モノ}とてぬ

のひ来い——と也表物種を記^ヒ法上ぬれむ申の

やとるし——と 入道明る上何とくやとるなり

うぬの——と 父のたぬとぬぬひしと也

ぬるもれ——の 中文よ的る上付^{ツキ}まてまこと思ぬなり

のくろいひはふ 子三 尼ふにそひぢもくますゆへふれも尼ふ
ためとばかり

よりまハ 尼悉れ明るよくくひたふなり

のふにたてまつり 明る上討

ゆゑ一まうひと 五文条文に五治ふまを尼ふ何ぞ

もあゝなれともやうひちと也

のうふぢなき 源乃尼悉をのうふぢ解すひようく明る

上れくくまぢ入り

まぬくたのけだ ぬはへれ中乃扱とまを

まらととく 五文一りのる乃女涉へ事りゆへと也

めいらくまことゆへ 五の文涉延生ノ事なり

春文の心をいへり

文と前 五文乃神阿居のひとく ヤキ 五文とローまを

お今集才一卷二条治と五文の五息ふとすう一回ゆ子

乃あふなれまふもくまを也 瞬

程も五文方に 年れゆりぬ心也

なめらいひひく カニ 懽あるをひくく明る上るやぢあり

たいのう人かや 業上りのあへぬこまふとれなり

ぬまへり 女乃の茶

おもふふぬに 五のりま乃ゆ代り成とばかり

今更のちちめを 明る上よりけく成とも條終と女涉見

ぬまへりまかゆのあゝすまを也

ひつりーをあや一か 个道れ^{シユセキ}乃揚^{ヤリタイ}也

何^ニ物^ト事^トあり 夕^{ユラ}親^{コト}な^レの^キ親^{コト}とんとよむ^レ可

後^{コト}に^{シテ}な^レく^レん^レん^レの

りし^{コト}ありと^{シテ}た^テ 沸^ヒ代^ノな^レん^レし^テり^トと^ル可^シ

か^キも^トこ^トよ^クなく ぬ^ル上^ノり^ハ長^キ命^ノの^{コト}なり

ゆ^つり^しも^もも ぬ^ルみ^のう^い母^ト人^トよ^クな^レん^レ可^シ

と^{シテ}業^ノう^レ讓^ルら^レん^レなり

ゆ^つり^しも^もも 業^ノ上^ノぬ^ルみ^のう^い母^ト人^トよ^クな^レん^レ可^シ

なり^ト也

ゆ^つり^しも^もも^ノぬ^ルみ^のう^い母^ト人^トよ^クな^レん^レ可^シ

なり^ト也

ゆ^つり^しも^もも 女^ノは^レゆ^つり^しも^もの^{コト}なり^ト也

ゆ^つり^しも^もも 院^ノを^レぬ^ルみ^のう^い母^ト人^トよ^クな^レん^レ可^シ

ゆ^つり^しも^もも 明^ル上^ノ

ゆ^つり^しも^もも 湯^ノ目^ノお^のの^{コト}あり^ト也

ゆ^つり^しも^もも ぬ^ルみ^のう^い母^ト人^トよ^クな^レん^レ可^シ

ゆ^つり^しも^もも 業^ノ上^ノに^レゆ^つり^しも^もの^{コト}あり^ト也

ゆ^つり^しも^もも 業^ノ上^ノに^レゆ^つり^しも^もの^{コト}あり^ト也

業^ノ上^ノに^レゆ^つり^しも^もの^{コト}あり^ト也

ゆ^つり^しも^もも 明^ル上^ノに^レゆ^つり^しも^もの^{コト}あり^ト也

ゆ^つり^しも^もも 思^ハひ^ノこ^トな^レん^レ可^シ

ゆ^つり^しも^もも 此^ノ日^ノぬ^ルみ^のう^い母^ト人^トよ^クな^レん^レ可^シ

かよむも一 上 明成を嘗てし不答いふんや男の子よ

ハと也 カ りまをたき位 カ けをたふとむなり

さのーり

法中ともお ぬる上と業の中う海とんとる

るたてく 源氏と法年よりしとまういゆめと也

あつきうやうお 明る上へれたもゆ連るりの源氏法云

辭しゆめとぬる上のぬきまをてるたたま

ゆへれ事かたる

ゆとまよけお 明る上の神

あぞの物

るまのをらせぬる 源氏は悪い カ おと一針を下る

念の罰を カ 三まげにむるあし

ぬきしともあつたれし 入るの事ぬぬる上はなふ

みくくも入れたなり

ぬむもあつせ 源氏ものもとまらんとぬむ

まーれ カ もいぬれ也

あつられ年比 明る入道の事成のぬへ

こよなぬらんハ カ 滅とんしと勝る カ けがなり

ありとさうこく 利振りの人も入るの振る カ けを

つとむる人を カ する カ 自給ふらこのゆの カ 因果

らんとなり

ひーまばら 仏法 カ をせす カ と也

あゝぬ世よ 尊處へいひぬくことなり
今をいのめるよ詞

鳥は縁 ちよきの一もをさしぬくもつありあつたは
人きさうさし

あふ悉りのふ 源氏れ熟りる姓とつなり
阿や一くまうさ 明る入道と源なる出まり

あうき契 尼と入道とのりあり
いつらや一さちしじ 梵字も天竺の文字なり

十二れ麻多世又の對ふれとあまあり筆迹乃憑と云り
あらんしとくじあま 源へ入せやとあへるさ

あまれそ乃あり あむれくれしふる今又海なること也
あゝにいふてあはきといふたあなり

あのみあう 尊世乃いやなとて官位のしつなり
一やなり

あんがれれとく 秋乃てサ平なることなり
忠又民戸の門征伐乃大御軍なるまゝるふ勲賞乃定ま

ける町邊に賞れうこうししとてたころしあれ
と一とされたるまゝと申のたあお刑れ類一とて

れられハゆれ貴れ類はをゆへとてあまとやゆれ
あれやもつ井は沙汰するにやり盟類は民戸の心善お

よましてまけて昌貴乃券契とまげら家お取てま
にまわりてまをまゝり十指乃れは乃こうまてせ出て

まてあゝおなと ぬる上と意上とるれはあゝの故いよ
と也又姉^{ヒメキミ}君の平れ母とて明る上おな事て意上へうや
くもきとても此^{ココロ}助められしとるる事と也あゝし
故あゝいけりる乃や可也

りあへ乃をの 継母^{ケイボ}れるうへへいよまゝとるる事と
らぬりしたる事即あだもうされとも心^{ココロ}感^カん^ンし
とやうとへの事一まあうすさうれと事^{コト}れ^レし
り^リて^テ継母^{ケイボ}まづ^マつ^ツて^テこ^コり^リた^タり^リた^タり^リと^ト也 等^ナ心^{シン}
らうく^ク一^{ヒト}を^ヲ 我^ガ利^リ根^ネた^テて^テて^テ別^ワれ^レを^ヲ通^スと^ト也あや
りても下乃ひきり何とあゝんやの事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
あらん^ンと^ト朋^{トウ}友^{ユウ}な^ナや^ヤの中^{ナカ}へ^ヘの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ

ひーれ世のうゝあゝぬ人 たゞれせり人の中れ
しと成りりり あゝいぬと也 其^シあ^アら^ラず^ズの中^{ナカ}へ^ヘに
う^ウあ^アら^ラず^ズも^モあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
とすんもされつり^リと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
あ^アら^ラず^ズと^ト 我^ガを^ヲ人^ニも^モあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
ら^ラい^イる^ル事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
たりひくも くらとこ
ゆへりー ぬまが姓由^{コト}ハ^ハじ^ジと^トあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
い^イは^ハ二^ニの^ノ巻^{マキ}れ^レお^オ定^サの^ノ心^{シン}あ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
あ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
ら^ラい^イと^ト あ^アま^マら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ
あ^アま^マら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズと^トあ^アら^ラず^ズの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラず^ズ

ひよきて 明とあ りしれはるひのそとにけた
 れひなるるー 洛次涌文 洛あま 洪水なりと
 字注 あのとにひらりるるるの心 ひよきあも
 あらうーとあけいふそいひとなり
 うへの人を 雲上乃水海狭くなりと死とも
 そこおを 明る上とて深く入り
 ねんまを梅と ぬる乃也音 雲上乃を撥さぬ心けり
 ひとあなり
 めとまーと物よ 雲上乃水海一れりのよもぬる上と
 ねのひ新をぬとなり

うとなくぬぬれ 明の上乃上とぬぬきさうらふれとま
 あく流なり
 きてゆくぬれ 雲上れえりなりふりてとや
 乃こころ^{カラキ} ぬてあしうや
 うれ流たぬぬ ぬる上乃たぬりもぬぬを^{チコロ} 雲上
 思ひ流へる
 ゆつりさあそ 物々^{ヒメキミ} ぬぬと見なけまとも不流ゆへ明る
 上へゆつり流る流中もさしーしううぬとなり
 うれも又とりりうて ぬる上雲とまーとまてな乃ぬの
 かけぬされ早下^{ヒダゲ} ありぬ中ーとまとなり
 ぬもさくるれも ぬぬ^{リヤウ} ぬぬとぬぬとぬ

うけよ 源九沙心

あつたやうく 是ハよき人とゆへに

さうやうこそ 我々も卑下志と云ふこと

たゞ人 女と同教なれども 雲上へ源つゝるは 源め

あつたといふ 雲上を志乃素と称し ねりふも理也 何するに 是具

し 源つゝるかなのめも 大いなるぬと也 女にへし

うも人の心さへ けりり女にへし ちかひに 源つゝるあつた

志つゝるまゝなりと云ふこと

わづらひすうらん 雲上も或戸のまなまとも 女にハ今

廣乃位と也

志つゝるこち 故に明る上 故にひなうとも也

我すくそし 的の上 雲上とお對れやうならんときり

山位と 入道山位と云ふこと

ゆくりのそれよ 邪波多羅の福地園より 権まゐてあ

らんつれくまゐるれ 邪波 奥入おいふを 不用と云ふこと

あつた九儀と云 伊豫地 権の注 権房乃る 後成

の不用と云 九早なられりて 志つゝるすといひて

ありるんこと云 権勝云々 権の権ありと 可心得

私や志のたつを 志乃妻 権かられ 母を権まくと云ふこと

ら 成せししたるを云 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃

尼の明る上と云 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃

大おれ志 夕寄女志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃 志乃

うしろ人 ぬん

物思ひなける哉 又心中月々のやうおひまのりなりぬ
人れ申にのやのなる心をあさるゝゆれと物思
けりあつたれよひのたぐめおけつぬとさるまなり
おたののなるをよそひ乃句を可切

みねもつり 紫上の折を命おのひとて入る

牙に人まねぬ思ひいふんも花よのかりいある人
もこうらうをさる人ようち海しほいをれよひ
うせうかろやうにたゆむこと

らうくく一々 ぬ紫よるをたれと也

とらくくおれ一々 源れ思人成々の只今心け心中也
おふあるれ せらうをぬれと外空けりり源乃一

らうせらふまの思事あ〜んと也

院中のみんや 兼蓮院 抱心申

こ〜けな〜も 女と〜月の物〜ら〜紫上〜
城あれぬも〜も〜と〜

た〜ひな〜に〜う〜あ〜ゆ〜め 源程おをな

ちもとかり

小約後とりよ 女とま乃めれとすと抱本れ史の〜ハ

めのまを

かいありて 六葉院近道心也

しとほや 何ゆもさた〜かり

こちもつ〜せり 崔小弓也 至別家

うらら人 ぬん

物思ひなける哉 夕心中月々のやうおひまわりなりぬ
人れ中一のやのなる心をあさるゝうれと物のま
はるあつさぬよひのたぐめおけつぬとさるまなり
おたつものなるをよめてひ乃句を可切

みーれもつし 紫上の折を命おのひとてへゆへま

野分れ朝みーなり

目のほお方 志邦^邦存

らうくくーえ ぬ紫よるをたれと也

とらくくおれーさ 源れ思人成夕の只今心け心中也

おふあるれ せあうそぬれと外空けりり源乃ー

ろとぬあまの事あ〜んと也

院中めい^院や 兼佳院 抱心^中

こーけなるとも 女と目り物ま〜らと紫よる

城あれぬやうもさや〜とる也

た〜ひなさぬぬに〜うあた〜ゆめ 源程おをな

ちもとかり

小約後とりふ 女とま乃めれとすと物本れ夫のと〜ハ

めのまを

かいありて 六条院^院道心^道也

しとほや 何りもるた〜りかり

こちとらささや 崔小弓也 至別家

うしつれ町 花おろし也

あはれて ことくくたとまひれ一うあつ西白物也

まり 兼帝カミミカド西階元興寺ニ大なる板イタ本あり 是なりとてや

して夫を望みあそびしとて

ちんせん乃ひり 寝殿ニ乃重むきと来しと南乃むの

まへ人のいかりて花ののたのふかりて鞠マド

のかりありたりつないこまはわりはりも 小 兄弟ケイテイ二人

まへしつる 年九廿 ころとらん

年官も 儀式キギシキなるとかひ乃鞠マドがやハまきしらぬシラ蹴り

わがまゑふけりまき 不替とや

うしつれよつひ 源乃清の上とてとてあそそえ

あそび

まへしつる 煙カク式 ころとらん 鞠マドの心の

いふまゝよひに對タテしての詞也

あつらん ころとらん ころとらん

あそび ちんせん

あそびのみこころしとて 麻アサ

れりしをみゆるをぬる

みり乃る 寢殿のむじまに階ありとて

あそびもまき 共なりとて

あそびもまき花まりとていふよりいふあつらん 母ハハ 後鳥羽院ゴトウよりとて

あつらりのひい 新修日高冠額ニッポウカウガク 板イタ乃所厚習ニクナリ群グン也

うゝゝゝれ町 花おろし也

北はあて ことくく北と云ひたうゝある西白物也
まり 菱帝^{カクテシ}元無寺^ニ大なる概^{キキキ}本ある 是なりと云や
して天を望みあそびしと云

ちんちん乃ひり 寝返乃重むきと来しと南乃むひ
よりとや回中^シの玉巻後^ニ母院之町^ニより出まると
とこれ并 共あれたけたりと 兄弟^{キヤウテイ}二人

まゝゝゝ 年乃りゝととゝく
年官も 儀式^{キニキカシ}なるとかむ乃鞠^{キリ}がやハまゝゝらぬ^{シテ}蹴^キり
わらさふゆゝとまを 不昔とや

うしゆりれよつひ 源乃清乃上^ニ見^ニてとあそそとされ

あゝゝゝ

まゝゝゝ 煙^{カクキ}式 ことあそとあつみ鞠^キの心の

ひゝゝゝよひに射^チての討也

あゝゝゝ人ゝゝ ちりるあつみひりさるともあつみ

あゝゝゝ ちんちん

あゝゝゝみ^ニこ^ニう^ニし^ニと^ニる 麻^マ

れりゝゝみゆらとあつみ

みりゝゝる 寝敷の重むきに階あるを

おとゝもまを 共^ニつ^ニま

鞠^{キリ}よりゝ不^コ更^{シツ}あ^カ実^カ也^カと^カ鞠^キ 後^キ鳥^ト母^ノ院^ノよりと云

あゝゝゝのひゝゝ 初^{ハツ}候^キ日^ニ高^カ冠^カ額^カ 根^ネ乃^ノ所^ノ厚^ク習^ヒ舞^マ也^カ

一教^{ホウニョウ}を公^{コウ}して冠^{カウリ}くつろぐ也 朗^{ロウ}秘^ヒ秘^ヒ自^ジ也亦引^{イキ}共^{キョウ}也

くく鞠の神也

あくく乃^ノぬぐ

^{カキテシラシラスハク}長白^{チヤク}裏^{ウラ}獲^{カク}芳^{ホウ}

瞬

さくぬえ乃^ノすき ぬくこころをあへむはるるなり

さくぬえ乃^ノすき ぬくこころをあへむはるるなり

さくぬえ乃^ノすき ぬくこころをあへむはるるなり

さくぬえ乃^ノすき ぬくこころをあへむはるるなり

さくぬえ乃^ノすき ぬくこころをあへむはるるなり

さくぬえ乃^ノすき

あくくをよきて 引^{ヒキ}き不^フ及^キ 極^{キョク}とく鞠^{キウ}成^{セイ}をいへ

ゆくはるるなり

ぬく袋^{フクロ} ぬくをふたの紙^シ又^{マタ}ふたれ糸^{イト}をあへむはるるなり

ぬく袋^{フクロ} ぬくをふたの紙^シ又^{マタ}ふたれ糸^{イト}をあへむはるるなり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

ひくくろふ 引^{ヒキ}きくろふひり

一袋^{ホウコウ}を^{シラ}て冠^{カウリ}くつろぐ也 朗^{シラ}秘^ヒ終^{シラ}自^{シラ}也亦引共也

くく鞠の神也

あくく乃^ハぬぐ

^{カウリ}表^{シラ}白^{シラ}裏^{シラ}襦^{シラ}芳^{シラ}

瞬

さくぬえ乃^ハすき ぬくこころを^ハあへむ^ハか^ハるる^ハなり

さくぬえる^ハ家^ハく^ハの^ハは^ハく^ハの^ハな^ハら^ハと^ハも^ハ也

さくぬえ^ハて 乞^ハも^ハ心^ハは^ハ但^ハ資^ハ雅^ハ心^ハを^ハめ^ハこれ^ハ枝^ハと^ハ膝^ハも

さす^ハと^ハさ^ハ不^ハ入^ハる^ハ也 資^ハ雅^ハハ^ハ多^ハ源^ハ氏^ハ法^ハ本^ハ型^ハと

云^ハ蹴^ハ鞠^ハ乃^ハ家^ハる^ハと^ハ多^ハ雅^ハの^ハれ^ハ子^ハ 多^ハ雅^ハハ^ハ坂^ハ本^ハ院^ハ河^ハ内^ハれ

ま^ハり^ハあ^ハと^ハなり

あくくを^ハよ^ハま^ハて 引^ハき^ハ不^ハ及^ハ 操^ハと^ハも^ハ鞠^ハ成^ハを^ハい^ハへ^ハと^ハも

い^ハく^ハな^ハり^ハる^ハ也

ぬ^ハこ^ハ袋^ハ ぬ^ハあ^ハを^ハ不^ハ文^ハの^ハ紙^ハ又^ハ不^ハ文^ハれ^ハ糸^ハと^ハあ^ハん^ハと^ハす^ハま^ハた^ハ

ぶ^ハ袋^ハ小^ハ入^ハと^ハや^ハわ^ハ袋^ハ之^ハ月^ハは^ハれ^ハも^ハ春^ハの^ハ向^ハと^ハも

ひ^ハこ^ハろ^ハふ 引^ハけ^ハく^ハろ^ハふ^ハひ^ハり

甲^ハより^ハ甲^ハれ^ハも^ハつ^ハ乃^ハ乃^ハ 糸^ハの^ハう^ハと^ハも^ハ 籠^ハ中^ハ

れ^ハ糸^ハの^ハ指^ハ乃^ハそ^ハと^ハま^ハひ^ハも^ハや^ハは^ハ後^ハ脚^ハ不^ハと^ハ瞬^ハも^ハも^ハも^ハも^ハ

り^ハこ^ハろ^ハも^ハま^ハた^ハ二^ハ番^ハふ^ハめ^ハと^ハら^ハる^ハ糸^ハの^ハ指^ハと^ハ可^ハむ^ハ得^ハ

ま^ハま^ハい^ハふ^ハ 次^ハく^ハに^ハと^ハま^ハひ^ハり

あ^ハう^ハれ^ハは^ハ双^ハ紙^ハの^ハ書^ハや^ハま^ハぬ^ハの^ハつ^ハと^ハま^ハる^ハと^ハも^ハも^ハも^ハも^ハ

あ^ハと^ハあ^ハる^ハも^ハ 瞬^ハと^ハは^ハ瞬^ハと^ハも^ハも^ハ

人^ハの^ハあ^ハら^ハる^ハも^ハ あ^ハら^ハる^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ也

と^ハあ^ハら^ハる^ハも^ハ あ^ハら^ハる^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ也

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured.

わてるに 拍子

たの乃南行もて 東^{オウ}舞^{マユ}の鹿^カ乃^ノこ^コ意^イ上^{ジョウ}恒^{コト}め^メ方^{カタ}也

まを 兵^{ヘイ}戸^コの

わらう^{ワラウ} 園^{エン}者^{シャ}

所^{トコロ}よりら^ラい^イ括^{クツ}束^スとへ^ヘま^マひ^ヒら^ラる^ル様^{サマ}也 ち^チり^リの^ノゆ

種^{タネ}子^コ括^{クツ}束^ス李^リ栢^{ハク}子^コと^トふ^フこ^コ何^{ナニ}か^カお^オ遠^{トウ}ま^マる^ル一^{イチ}去^{キョ}年^{ネン}れ^レり

り^リの^ノ青^{アヲ}と^トみ^ミぬ

つ^ツて^テや^ヤこ^コま^マの^ノ意^イ上^{ジョウ}

わ^ワら^ラう^ウ様^{サマ}も^モま^マら^ラれ^レと 肉^{ニク}の^ノ心^{シン}を^ヲ一^{イチ}め^メる^ルま^マと^トる^ルこ^コ

う^ウら^ラの^ノよう^ウい 中庸^{チュウユウ}云^{クニ}志^シ子^コ戒^{カイ}法^{ホウ}平^{ヘイ}を^ヲ所^{トコロ}不^フ賭^ト恐^{コウ}懼^ク平^{ヘイ}を^ヲ

不^フ平^{ヘイ}又^{マタ}莫^ム實^{ジツ}源^{ゲン}莫^ム頭^{トウ}平^{ヘイ}徹^{トウ} 在^ニ志^シ子^コ括^{クツ}束^ス独^{ドク}呼^{コト}

み^ミと^ト乃^ノ内^{ナイ}外^{ガイ}物^{モノ}足^タも^モ用^{ヨウ}心^{シン}あ^アる^ル舞^{マユ}ま^マの^ノこ^コ一^{イチ}る^ルま^マ

室^{シツ}相^{ソウ}と^ト志^シ出^{シュツ}門^{モン}括^{クツ}束^ス友^{ユウ}

え^エの^ノれ^レま^マと^トを 其^{ソノ}お^オ侍^シと思^シふ^フ拍^{ハク}を^ヲ上^{ウヘ}と^ト下^{シタ}と^ト此^{ココ}様^{サマ}が^ガり

こ^コう^ウも^モみ^ミし^シつ^ツれ 一^{イチ}の^ノま^マの^ノ

ま^マの^ノく^ク一^{イチ}ま^マを^ヲせ^セれ^レる^ルま^マの^ノ家^カ風^{フウ}を^ヲと^トる^ルま^マ

家^カれ^レの^ノ人^ニが^ガお 鞠^{マユ}の^ノ事^{コト}を^ヲあ^アと^トめ^メた^タま^マと^ト也

お^オの^ノ人^ニあ^アり^リひ^ヒて 双^{スウ}対^{タイ}め^メさ^サれ^レる^ル人^ニと^ト也 此^{ココ}様^{サマ}也

ま^マの^ノ清^{スガ}り 女^メ三^{サン}也

中^{ナカ}れ^レ清^{スガ}ら^ラな^ナる^ル 意^イと^ト源^{ゲン}と^トの^ノ中^{ナカ}也^也

お^オの^ノく^クを^ヲ切^キて^テは^ハま^マも^モき^キる^ル一^{イチ}

た^タい^イく^ク一^{イチ}れ^レ退^{タイ}る^ルの^ノり^リて^テの^ノあ^アる^ルま^マの^ノま^マと^ト也

あつたまよ 世はかき平よるしそくそてあてはやまき
おちえんちりよき

あかりまほへ 柏をくまへそぬんあて女三おはれま
りのまよき

いふれハ云 源氏女三よよとまりあまを結う
常のハ源よきして 櫛ハ女三よき也 常のハ花よき

あつたまよの 世のあつたあつたハ女三よき
あつたまよ

あつたまよ 三山あよよるちきそあつたまよの
あつたまよ 三山あよよるちきそあつたまよ

ち山あよよるちきそあつたまよのまよき
もあつたまよのまよき
ハまよきあつたまよのまよき
トヨノまよきあつたまよのまよき
あつたまよのまよき
まよきあつたまよのまよき
あつたまよのまよき

あつたまよのまよき
あつたまよのまよき
あつたまよのまよき
あつたまよのまよき

あつたまよのまよき
あつたまよのまよき
あつたまよのまよき

あつたまよのまよき
あつたまよのまよき
あつたまよのまよき

あつたまよのまよき
あつたまよのまよき
あつたまよのまよき

あつたまよのまよき
あつたまよのまよき
あつたまよのまよき

こゝろのたま 世にわが平よるしそてあてはやまき
おちもさうりよ

あかりまほへ 柏をくまへさぬ人あり女三おほはま
りのま

いふれハタ 源氏女三よよとまりあまを
常のハ源よはして 櫛ハ女三よや 常の花よ

あつたあめ 汝国のをあつたあめこれハ女三よは
あつたあり

ちよあふあ 三よあよるちよあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあ

花をハ馬れーとあり 源をたつたあつたあつたあ
女三 河ニ雄畧天兒は時義作國ツルキと云あよ
相見し人婦子ヲ負テ行ニ執事ニとてあつたあつたあ
よあり故ニあつたあつたあ

ひんあつたあ 一ゆあつたあつたあつたあつたあ
うんのまハ 柏本あつたあつたあ

わくあつたあ 柏の思ひあつたあつたあつたあ
これハあつたあ

ういさく 苦痛也
あつたあつたあ 養在源家ハ未識

小のあつたあ ともへとあつたあ

あつたあつたあ

十三 手紙
みつきりりり 院中れきとりん 玉物名取^ナくきき野の
名取也 立ちぬりまこちかき^ナ一面教とみのさめりり
乃忘り^ナてりり

みれとー 柏の上をまき

あやなくらふら みとをわくすみまをぬ人乃ま^ナらふ
あやなくをわやうめ^ナさん 又れまもをすり

よあう^ナみてき 柏 仕りま^ナもはり

うとつれ 柏乃鞠の町を^ナ中とみ^ナ事と末^ナなる

又あ人あまる 源乃女三まへ^ナま^ナるはをみ^ナ柏まよ

あは^ナり^ナひ^ナく^ナる^ナを^ナみる^ナと^ナり^ナ竹と^ナなり

ま^ナり^ナり^ナ乃^ナひ^ナれ^ナり^ナ 小侍^ナ後のひ^ナま^ナん^ナふ^ナ急^ナ結^ナく^ナり

源乃様ま^ナま^ナを^ナり^ナ也

みまきぬ とすま^ナの^ナす^ナの^ナま^ナれ^ナひ^ナれ

り^ナり^ナま^ナあ^ナし 源へ大おの^ナの^ナま^ナを^ナけ^ナひ^ナて^ナま^ナと^ナなり

ひ^ナり^ナら^ナそ^ナと^ナあ^ナめ^ナり^ナま^ナる 双也

ま^ナり^ナれ^ナり^ナ ち^ナに^ナ小^ナ侍^ナ後の^ナま^ナる^ナ書^ナり

一日つれ^ナなり^ナ不^ナと^ナな^ナむ 柏れ思^ナひ^ナと^ナ鞠^ナの^ナ町^ナ思^ナひ^ナれ^ナり

と^ナ中^ナみ^ナ流^ナひ^ナと^ナ不^ナま^ナと^ナめ^ナま^ナ海^ナ志^ナを^ナ小^ナ侍^ナ後^ナひ^ナま

ま^ナら^ナく^ナ思^ナひ^ナれ^ナり^ナり^ナの^ナま^ナを^ナあ^ナら^ナに^ナひ^ナま^ナゆ^ナる^ナま^ナり

あ^ナら^ナく^ナ思^ナひ^ナれ^ナり^ナぬ^ナや^ナり^ナあ^ナや^ナと^ナら^ナめ^ナて^ナなり

候^ナれ^ナも^ナつ^ナれ^ナり^ナか^ナな^ナつ^ナれ^ナも^ナ袂^ナの^ナ町^ナ候^ナの^ナ

わ^ナら^ナい^ナ 詞^ナけ^ナり^ナれ

今所レ亦レ方 心レ的也 不レ及レ訂レ家
訂レ家レ之レ志レ之レ人レ之レ心レ也



